

**国際ワークショップ
人々の健康づくりと地域づくり
を通じた平和づくり**

**INTERNATIONAL WORKSHOP ON
PEACE BUILDING THROUGH COMMUNITY HEALTH
AND DEVELOPMENT**

報告書



2011年3月21日 - 28日 カンボジア・シエムリアップにて

March 21-28, 2011

New Siem Reap Town Hotel and Spa

Siem Reap Angkor, Kingdom of Cambodia

主催

カンプチア開発パートナーシップ

Partnership Development in Kampuchea (PADEK)

アジア保健研修所

Asian Health Institute (AHI)

目次

経緯	P	2
概要・日程	P	7
前日オリエンテーション	P	12
Day1 開講式・オリエンテーション	P	13
Day2 カンボジアの歴史と平和への動機	P	23
Day3 事例発表	P	25
Day4 事例発表	P	30
Day5・6 現場訪問	P	38
Day7 現場訪問 振り返り・分析	P	38
Day8 全体まとめ 活動計画作成 評価 修了式	P	40

List of Annexes 【添付参照リスト 英文報告書を参照のこと】

Annex 1:	Workshop Outline
Annex 2:	List of Participants
Annex 3:	Welcome Speech by Mr. Kep Kannaro, Padek Executive Director
Annex 4:	Workshop Remarks by Ms UI Shiori, AHI International Workshop Coordinator
Annex 5:	Opening Speech by H.E Mr. Pov Piseth, Member of Siem Reap Provincial Councils
Annex 6:	Sharing Guideline
Annex 7:	Overview, History and Background of Cambodia
Annex 8:	Case Presentation 1: Nagdilaab Foundation Incorporated (Nagdilaab, Philippines)
Annex 9:	Case Presentation 3: Sustainable Hygiene Marketing for Community Volunteers in Liquisa and Lautem Districts (AFMET, Timor Leste)
Annex 10:	Case Presentation 4: Peace Building through Community Health Forum (MEDICAM, Cambodia)
Annex 11:	Case Presentation 5: Citizens' Peace Movement (Yuko, Japan)
Annex 12:	Case Presentation 6: Peace Building Activities in Grassroots: Fostering "Peace Messenger" of Next Generation (Kyoko, AHI, Japan)
Annex 13:	Case Presentation 7: Peace building through Participatory Health Promotion Training: A Case of Cambodia (UI Shiori, AHI, Japan))
Annex 14:	Case Presentation 8: Peace Building in Health System and Community Based Primary Health Network and Advocacy (CYDC, Cambodia)
Annex 15:	Presentation 9: History of Peoples' Struggle for Democracy (Manohar, SRCD, Nepal)
Annex 16:	Presentation 10: Padek's Case: Building Peace through Community Health and Development (Padek, Cambodia)
Annex 17:	Field Visit Guidelines, Schedules, Commune Profiles
Annex 18:	Workshop Evaluation Sheet
Annex 19:	Closing remarks of Mr. Kep Kannaro, Padek
Annex 20:	Closing remarks by Ms. UI Shiori, AHI
Annex 21:	Closing speech by H.E Chan Sopha, Chief of Provincial Council

■国際ワークショップとは

- ・ A H I 国際研修の元参加者と、ともに活動する地域のパートナーが対象でありチームとして参加する。
- ・ 共通する特定課題について議論する。
- ・ 現場経験交流である。
- ・ 多言語で行われる。
- ・ A H I 国際研修の元参加者が所属する団体がホスト団体となり、その活動地域のパートナーによる協働開催で行われる。A H I は共催団体としてサポートする。
- ・ 2000 年～各国で開催している。今回は実質 5 回目となる。

■ホスト団体 カンプチア開発パートナーシップ PADEK: Partnership for Development in Kampuchea について

PADEK は、クウェーカー系団体で活動していたアメリカ人エバ・ミシリウィック (Eva Mysliwicz) 氏が、当時のカンボジアに援助協力をしてきたオクスファム系の団体の支援資金をまとめて立ち上げ、1986 年に活動を開始した。カンボジアで活動する老舗 NGO の一つである。他の西側援助団体と同様、80 年代は中央政府の直接管轄下、インフラも含めて中央省庁の要請に基づいた支援を行っていた。1994 年からは、プレイベン (Prey Veng) 州で農業開発を入り口にした農村ベースの活動を開始した。各村で、貯蓄貸し出しを通じた自助グループ (Self-help group: SHG) づくりを基本にした村落総合開発に力を入れ、プノンペン周辺州で村落開発と住民組織づくりを展開した。

1999 年には、その活動手法を、PADEK 総合地域開発モデル (Padek's Integrated Community Development Model : PICDM) としてまとめた。経験浅い地元 NGO の要請に基づいて、講師を派遣したり訪問研修の受け入れなども行ってきた。その後 2002 年のコミュン評議会選挙とともに地方分権が進み始めると、地方行政の能力強化と住民組織の地方開発のプロセスへの参加を促す役割も加えて PICDM を改訂している。現モデルでは、各地域 (単位としては、コミュン [集合村]) ごと、概ね初めの 5 年間で住民組織づくりと集約的な関わりをし、6-10 年目はフォローアップ強化、11 年目に住民組織の完全独立を目指している。

シムリアップ (Siem Reap) 州の北部の元戦闘地域 (1998 年まで、「integration area」とカンボジアでは呼んでいる) には、戦闘終了間もなく現地調査に入り、PICDM をはじめとして他地域で培った経験を応用して活動展開をしている。また、市民社会に関する NGO ネットワークやカンボジア開発調査協会 (Cambodia Development Research Institute : CDRI) で要職を担い、地方分権やグッドガバナンス (good governance) の分野でも、政策提言活動のリーダーシップをとっている。(原文「地方分権や、good governance、市民社会に関する NGO ネットワークや CDRI (Cambodia Development Research Institute) でも要職を担い、政策提言活動のリーダーシップもとっている。」)

参考 カンボジアについて



- [統計数字は世界子ども白書 2010 より]
- * 飛行機で日本から 7 時間 (時差 2 時間)
 - * 4000 リエル = 1 ドル (ガソリン 1 ℓ 弱)
 - 500ml の水 : 2000 リエル
 - * 面積 : 18.1 万 km² 日本の 1/2 弱
 - * 人口 : 1480 万人 [2008] 日本の 1/8~1/9
 - * 平均寿命 : 61 歳 日本 83 歳 [2008]
 - * 5 歳未満児死亡率 (1000 人あたり) : 90 人 日本 4 人 [2008]
 - * 妊産婦死亡率 (出生 10 万件あたり) : 540 人 (世界で 25 番目に高い) 日本 6 人 [2005]

インドシナ半島に位置する東南アジアの立憲君主制国家。東にベトナム、西にタイ、北にラオスと国境を接し、南は南シナ海に接する。首都はプノンペン。国民の 90%以上がクメール語 (カンボジア語) を話し、仏教 (上座部仏教) を奉ずるクメール人 (カンボジア人) である。2009 年の GDP は約 108 億ドル (約 0.9 兆円) であり、鳥取県の半分程の経済規模。[wikipedia より] 日本は最大の援助国のひとつ。

歴史

ポル・ポト政権以前 (内戦)	
1953	・ フランスから独立 → 王政 × 共産党
1960 年代	・ 共産党の流れをくんだポル・ポト派 (クメール・ルージュ) 成立 タイ国境沿いで反政府活動開始
1970	・ ベトナム戦争拡大、米軍の空爆 (カンボジアに侵入したベトコンの追撃) が始まる ・ 政府軍 (共和制) × ポル・ポト派の内戦激化
ポル・ポト政権時代	
1975	ポル・ポト派プノンペン入城 (4/17) ポル・ポト時代へ <ul style="list-style-type: none"> ・ 農村共産主義 (資本主義否定 / 平等追求) 住民大虐殺、私財没収 → 知識階層追放・殺害 = 医者・教師・弁護士失う、学校や病院・保健センターなど施設の破壊 → 地方への強制移住と集団労働、監視体制 ★ 地域、家族の文化・絆の破壊、人間不信 ★ 170~200 万人が死亡



ポル・ポト




都市住民は新人民と呼ばれ、農村で過酷な強制労働に



年齢・性別分けの集団生活 家族・地域の解体



少年兵たちが「オンカー」(相互監視)の要。密告と処刑が続く

1979	<ul style="list-style-type: none"> ベトナム軍侵攻→ポル・ポト政権崩壊、親ベトナム政権成立 →西側・国連（≒アメリカ）開発援助停止 ＝社会復興遅れる ポル・ポト派タイ国境沿いへ 政府軍×ポル・ポト派・王党派・共和派の内戦開始 タイ国境沿いに国連による難民キャンプ設置 一時は12~14万人が収容される 	 <p>カオイダン難民キャンプ</p>
内戦時代		
1980年代	<ul style="list-style-type: none"> 内戦長期化 1986年 国際NGOの資金援助を得て、アメリカ人によりPADEK創設。 	AHIカンボジア事業
1989	<ul style="list-style-type: none"> ベトナム軍撤退 	<ul style="list-style-type: none"> カンボジア保健省の地域保健担当職員への研修をカンボジアで開始 日本で行う国際研修にカンボジアからの参加者受入れ開始
和平協定後、復興期(内戦継続)		
1991	<ul style="list-style-type: none"> パリ和平協定→1992~93 国連の統治(UNTAC: 国連カンボジア暫定統治機構)、PKO派遣 カンボジア人によるNGO活動認められる ポル・ポト派、タイ国境地域を拠点に反政府活動継続 	
1993	<ul style="list-style-type: none"> 総選挙→2党連立政権＝武力衝突頻発 カンボジア王国(国王が国家元首)成立 	
1995		<ul style="list-style-type: none"> カンボジア保健省保健推進センター(NCHP)と連携し地方の保健推進担当者の研修開始
1997	<ul style="list-style-type: none"> 2党の武力衝突激化→外国からの支援撤退 	<ul style="list-style-type: none"> カンボジア国内の保健NGOのネットワーク(MEDiCAM)に加盟
1998	<ul style="list-style-type: none"> ポル・ポト派の副司令官投降 ポル・ポト死亡、ポル・ポト派解体 	
政権安定 経済発展期		
1999	<ul style="list-style-type: none"> ASEAN(東南アジア諸国連合)加盟 	
2000		<ul style="list-style-type: none"> 元ポル・ポト衛生兵がカンボジアでの研修に参加
2002		<ul style="list-style-type: none"> MEDiCAMの地元NGO育成担当者がAHIの国際研修参加

2003		・MEDiCAM と連携し地方(北西部)の研修開始
2004	・経済発展→WTO（世界貿易機構）加盟	・AHI の支援と MEDiCAM の協力を得て NCHP が地方 NGO の育成活動開始
2006	・カンボジア特別法廷開始 ポル・ポト政権幹部を裁く	・カンボジアでの研修に地方の NGO 職員参加
2008	・PADEK カンボジア人による NGO へ（現地化） （初代代表ケップ・カンナロさん）	
2010	・元強制収容所所長ドゥッチ被告に禁固 35 年の判決（09 年 虐殺生き残りのチュムメイ氏証人台に立つ）	・地方 NGO（元研修生）との連携事業開始
2011		・国際ワークショップ開催

■AHIの研修事業

- ・1980年設立。愛知県日進市にあるNGO。日本の市民によって支えられる。
- ・アジアの農山村、都市スラムなど貧しい人々が地域で活動する保健・開発ワーカー（村のリーダー・ボランティアを育成する「現地の」NGOワーカーや住民グループのリーダーたち）を育成。
- ・現地事務所をもたず、あくまでも「現地の村の人々が自分たちで自分たちの健康を守る（外部に頼らずに自立していく）ように村を変えて行く、作って行くことを支援する」。
- ・そのために「参加型研修」を日本で・アジアで 2010年10月現在 計5996名

○日本での国際研修 7～8カ国より約15名のNGOワーカーを招いて行う

2010年の国際研修の様子（2010年9月8日～10月11日）



↑PADEKより参加したサリックさん

○アジアで：現地の団体との協働による現地の課題に即した研修事業、元研修生との協働事業やフォローアップ事業（カンボジアでは：行政と地元NGO連携による住民の保健活動推進、元研修生の団体と協働企画する国際ワークショップなど

概要・日程

- テーマ： 国際ワークショップ 人々の健康と地域づくりを通じた平和づくり
- 日時： 2011年3月21日～28日
- 場所： カンボジア・シェムリアップ市 於 Hotel Siem Reap Town & Spa
- 主催： カンプチア開発パートナーシップ (Partnership Development in Kampuchea, PADEK)
財団法人アジア保健研修財団 アジア保健研修所 (Asian Health Institute, AHI)

- 参加者： 6カ国21名 (インドネシア3名、フィリピン4名、東ティモール2名、ネパール1名、日本1名、カンボジア10名)
傍聴 (部分参加含む) 5名、PADEK 運営チーム3名、AHI 職員2名

国際参加者		
インドネシア		
1 シスウォプラノト	ベテスタ鍼研修所 Bethesda Acupuncture Education Institute (B-AEI)	NGO 1999年国際研修・東洋医学研修参加
2 アグン・ハリボウォ	ングディ・ワラス (東洋医学療法師協会)	住民グループ
3 アジフ・バハサン	アル・ファトゥナ・イスラム神学校	宗教・政治団体
フィリピン		
4 ミリアム・リセラ・スアキート	ナグディラブ財団 Nagdilaab Foundation Incorporated	NGO 2006年国際研修参加
5 モモイ・アダス・コホンボ	ナグディラブ財団	NGO
6 アルカリ・エポー・ビスターリ	バシラン州・ラガヤス村村長、ラガヤス村水・衛生協会、保健ワーカー協会	住民グループ
7 ジェシカ・イスマ・フローレス	バシラン州・ラミタン町議会	行政
東ティモール		
8 ソアレス・ジュベンシオ	東ティモール医療友の会 Alliance of Friend for Medical Care in East Timor (AFMET)	NGO
9 ジルベルト・カルドソ	保健省ラウテム県保健課	行政
ネパール		
10 マノハー・クマール・コイララ	農村開発協会 Society for Rural Community Development (SRCD)	NGO 2004年国際研修参加
日本		
11 大熊優子	AHI 会員・ボランティア	NGO
カンボジア国内参加者		
12 サ・キムソーン	カンボジア青年開発センター Cambodian Youth Development Center (CYDC)	NGO 2004年国際研修参加
13 ポー・ボリン	カンボジア青年開発センター Cambodian Youth Development Center (CYDC)	NGO

14	エム・ソクハ	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
15	スレイ・コサール	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
16	ケアン・サムロット	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
17	ウス・マレン	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
18	サック・モム	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
19	イム・ポリン	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
20	サオ・バンナ	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
21	ティム・バンナ	カンプチア開発パートナーシップ Partnership Development in Kampuchea (PADEK)	NGO
傍聴・部分参加			
15	ソック・ソバナリス [3月23日]	カンボジア保健分野 NGO ネットワーク MEDiCAM (2011年2月末まで)	NGO 2002年国際研修参加
16	マック・チャンタ [3月21日～23日]	カンボジア保健分野 NGO ネットワーク MEDiCAM	NGO
17	オエップ・オアン [3月21日・22日]	カンボジア保健分野 NGO ネットワーク MEDiCAM	NGO 2011年国際研修参加予定
18	チュム・メイ [3月21日～23日]	クセム・クサン Ksem Ksan	NGO
19	上記同行スタッフ [3月21日～23日]	クセム・クサン Ksem Ksan	

【企画・運営チーム】

- PADEK : 1、ケップ・カンナロ (2001年国際研修参加)、PADEK 事務局長
 2、ソック・ソクンティア (2009年国際研修参加)
 3、ヘン・サリック (2010年国際研修参加)
 4、サン・サオ・アルン (2011年国際研修参加予定)
- AHI : 1、宇井志緒利 2、清水香子

■スケジュール・内容

日付	内容	備考
3/20	- 参加者到着 - 各グループ・参加者発表準備 17:00-18:00 クメール語講座(1) (サリック, PADEK) 20:30-22:00 事前オリエンテーション (PADEK, AHI) - 自己紹介: 氏名, 団体, 国, 活動について	

	<ul style="list-style-type: none"> - 生活面オリエンテーション, 第一日目のスケジュール, 全体スケジュールの配布、その他注意事項等 	
Day 1 3/21	<p>8:00-9:00 開講式 (司会 ソクンティア, PADEK)</p> <ul style="list-style-type: none"> - 挨拶 (カンナロ, PADEK) - AHI 紹介、国際ワークショップの目的説明 (宇井, AHI) - 祝辞 (ポウ・ピセス氏 シェムリアップ州議会議員) <p>10:30 セッション: オリエンテーション (PADEK, AHI)</p> <ul style="list-style-type: none"> - 参加者自己紹介 - 各自 Basic Question (国際ワークショップへの期待) の共有と最終化 - 全体スケジュール・内容協議と決定 <ul style="list-style-type: none"> o 内容とその時間設定 o 毎日の時間割 o 企画・運営チームの役割、参加者の役割(司会進行系の役割など) o ルール・約束事 - 平和づくりの基本概念 <ul style="list-style-type: none"> o 導入ゲーム：ピース・ライン (清水, AHI) o 平和づくりを進める際の関係者と戦略(カンナロ, PADEK) o 変化のレベル (宇井, AHI) - 国際ワークショップの流れ (宇井, AHI) - 事例発表オリエンテーション (1) : <ul style="list-style-type: none"> o コンフリクトの種類 (宇井, AHI) - カンボジア概要 (歴史・状況) (コサール, PADEK) - 一日の振り返り 	<p>ゲスト:</p> <p>現場訪問時の ホストファミ リー・キーパー ソン</p>
Day 2 3/22	<p>07:30 シェムリアップ市内見学</p> <ul style="list-style-type: none"> - ワットチュメイ (虐殺被害者慰霊塔) - アンコールワット・アンコールトム <p>12:00 昼食 (アンコールワット前の食堂にて)</p> <p>13:30 PADEK・シェムリアップ事務所訪問</p> <p>15:30 前日セッションの振り返り</p> <p>16:00 セッション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - 平和づくりに関わる動機の発表・共有 - 事例発表のオリエンテーション (2) - 一日の振り返り <p>18:30 夕食 (市内レストランにて・アップサラダンス鑑賞)</p>	<p>司会進行:</p> <p>フィリピンチ ーム</p>
Day 3 3/23	<p>07:30 クメール語講座(1) (ソクンティア, PADEK)</p> <p>08:00 セッション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - 前日の振り返り - 各国・チーム事例発表 <ul style="list-style-type: none"> o フィリピン o インドネシア o 東ティモール 	<p>司会進行:</p> <p>PADEK 参加者 チーム</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ○ MEDiCAM (カンボジア) ○ 日本 - 一日の振り返り <p>20:00 チュム・メイ氏(トゥールスレン強制収容所生き残りの一人・クメールルージュ法廷証人)のお話を聞く</p>	
Day 4 3/24	<p>07:30 クメール語講座(2) (サリック, PADEK)</p> <p>08:00 セッション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - 前日の振り返り - 各国・チーム事例発表 (続き) <ul style="list-style-type: none"> ○ AHI ○ ネパール ○ CYDC (カンボジア) - 各事例分析 - PADEK 事例発表とその方法論(総合的地域開発モデル PICDM) (カンナロ・ソクハ, PADEK) - 現場訪問オリエンテーション (サリック, PADEK) 	司会進行: インドネシア チーム
Day 5 3/25	<p>現場訪問とホームステイ (バリン郡)</p> <p>2 グループ→スパイ・ソール集合村へ</p> <p>2 グループ→プラサット集合村へ</p>	
Day 6 3/26	<p>現場訪問とホームステイ (アンコールチュム郡)</p> <p>4 グループ→タソム集合村</p>	
Day 7 3/27	<p>07:30 シェムリアップへの帰路にて、</p> <ul style="list-style-type: none"> - 自助グループのコミュニティショップ訪問 (アンコールトム郡ソムロン村) <p>15:30 セッション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - 現場訪問のまとめ(カンナロ, PADEK) <ul style="list-style-type: none"> ○ グループ作業: ガイドラインに沿った振り返りと提案 ○ 各グループでの発表と討議 <p>20:00 (希望者のみ) 「ヒロシマ・ナガサキ」 (原爆被害者へのインタビュー記録映画) DVD 鑑賞 (清水, AHI)</p>	司会進行: ネパール・ CYDC チーム
Day 8 3/28	<p>08:00 セッション:</p> <ul style="list-style-type: none"> - 前日の振り返り - 全体のまとめ (カンナロ, PADEK / デデット, Nagdilaab / 宇井, AHI) <ul style="list-style-type: none"> ○ 平和づくりのアプローチ, グローバル化・保健と紛争 ○ 公正平和 Justpeace の概念 ○ 各事例の再分析とまとめ - 活動計画づくりと発表 <ul style="list-style-type: none"> ○ オリエンテーション(宇井, AHI) ○ グループ作業: 各国チーム・国別で活動計画づくり ○ 発表とディスカッション 質疑応答、コメント・提案 - 評価 <p>16:00 閉講式 (司会 ソクンティア, PADEK)</p> <ul style="list-style-type: none"> - 主催者より挨拶 (カンナロ, PADEK) 	(午前) 司会進行: 日本チーム (午後) 司会進行: 東ティモール チーム

	<ul style="list-style-type: none"> - 参加者より挨拶 (デデット, Nagdilaab) - AHI より挨拶 (宇井, AHI) - 祝辞 チャン・ソファール氏, シェムリアップ州議会議長 - 修了証書授与 <p>18:30 親睦交流会</p>	
3/29	<ul style="list-style-type: none"> - 国際参加者帰国 - PADEK/AHI 評価会合 	

■事前オリエンテーション：

1) 歓迎の挨拶 (PADEK カンナロ)

主催団体 PADEK の事務局長として、ケップ・カンナロさんが挨拶を述べた。国際ワークショップを主催する機会を得たことに関する AHI への謝辞、また参加者への積極的な参加を期待する旨が語られた。

2) 自己紹介

各自が国、団体について短く紹介した

3) 生活オリエンテーション (PADEK ソクンティア)

- ・ 部屋について：部屋割り、朝食の時間 (6:30-7:30)、浴室の使い方、セッション中の各部屋の消灯、各部屋の電話の使用の制限
- ・ 夕食は基本的にホテル外の食堂、一日 2 回スナックが出る
- ・ Wifi の使用はホテル内のアクセスは可能
- ・ 体調に不調を感じた場合は、PADEK もしくは AHI の企画運営チームに声をかけること
- ・ 国際ワークショップの期間中に現場訪問を予定している。二泊を村の人々の家に宿泊する予定なので、2 泊分の準備をすること。蚊帳、蚊よけスプレー、懐中電灯は主催側より支給する

- ・ インドネシアの参加者シスウォさんより、修了証書の授与と、ワークショップ期間中の発表や資料のデータを、修了後に配布してほしい旨、要望があり、PADEK が準備することとなった。

- ・ AHI 清水より事務報告
 - ① リファンドについて
 - ② AHI 元研修参加者に対し、今回のワークショップに関する英文ニュースレター記事の提出について依頼があった。フォーマットを配布し、提出期限を 5 月 11 日とした。
執筆項目
 - 1、 直面している平和や争いの課題は何か、地域における平和づくりにおいて、どんな取り組みをしているのか
 - 2、 ワークショップで得た学びや気づきをどのように応用しようと考えているか
 - 3、 あなたのパートナーにとって、ワークショップへの参加はどのような意味があったか。
 - 4、 元研修生の国際研修後の支援事業に関する、AHI への提案や意見

4) 一日目のスケジュール説明 (PADEK カンナロ)

5) ワークショップ全日程と内容 (案) 配布

第一日目に参加者で最終化するため、参加者は事前に目を通しておくこととした。

6) その他 諸確認 (AHI 宇井・清水)

○ 国際研修の目的

1. 様々な国・地域における、地域の人々の健康促進と地域づくりを通して行われている平和づくりのとりくみを共有し、そこから、それぞれが発見や気づきを得る
2. PAKEK がシェムリアップ州で取り組んでいる総合地域開発モデルと住民の経験から学ぶ
3. 平和づくりに向けた、参加者同士の連帯とネットワークを築く

○ NGO からの参加者の役割

英語を話さない・苦手なパートナーへの通訳や補佐を必ず行うこと。

○ 各参加者の Basic Questions/期待提出について

事前に各参加者が提出した Basic Question の一覧が張り出され共有した。加えて、Basic Question は、

- ・ 日常の活動において直面し、解決したい課題であり、
- ・ 今回の国際ワークショップのテーマに沿ったものであること、
- ・ このワークショップ全体を通して、振り返り考慮されるべきものであること、
- ・ 短い文章で、明確・簡潔に、また具体的なものがふさわしい

という説明がされた。

以上を考慮し、未提出者および追加や変更がある者は、事例発表までにこの一覧に追加しておくこと、また同じく事例発表までに、各自で他の参加者のものも再度確認することとした。

参加者の Basic Question

- ・ 健康づくり・地域づくりの活動に平和づくりをどのように組みこむことができるか
- ・ 健康づくり・地域づくりを通して平和づくりを行うにはどうしたらよいか
- ・ 村・地域を平和にするためには何をすることが必要か
- ・ 自由市場やグローバル化が、どのように草の根での争いを生み出しているのか
- ・ 現行のとりくみの強みや改善点を知る
- ・ 地域での平和づくりのとりくみに、地域の行政や有力者の協力を得るにはどうしたらよいか
- ・ 地域保健計画を地域の開発計画にどのように統合させていくか
- ・ 平和づくりのとりくみを誰とどのようにすすめたらよいか
- ・ 地域の人々の連帯をどのように強めるか
- ・ 平和の課題について、人々、とくに若い世代の人々の意識をどのように高めていくか。
- ・ 軍事化を進めようとする政治の動きを阻むにはどうしたらよいか
- ・ 多元的共存主義運動と宗教観対話について
- ・ どのように避難民の故郷への帰還を促すか
- ・ 保健ボランティアを巻き込むにはどうしたらよいか
- ・ 人々の態度変容をどのように促すか
- ・ 伝統医療・東洋医学

○ 各チーム・団体の展示準備

会場の壁に、各チーム・団体の活動を掲示する場所を作った。明日までにそれぞれが準備し、事例発表までにお互いに閲覧しておくこととした。

○ メモランダム、参加者情報 (Participants' Information) と Questions & Answers (国・地域の状況・課題と活動に関する2種類のもの)の事前閲覧とパートナーへの説明

今回のワークショップにあたり、シスウォさんの提案により、各参加者・チームのデータ一覧 (Participants' Information) をまとめ、事前に AHI より各参加者に送付した、またそれに基づいて、シスウォさんより、各国・地域の状況および活動に関して質問が投げられ、それを Questions & Answers としてまとめたもの(2種類)も事前に送付した。これらの文書およびメモランダムについて、事例発表の前に各自で読んでおくこと、および NGO からの参加者はパートナーにそれらの内容を説明することを確認した。

■開講式（司会 PADEK ソクンティア）

シェムリアップ州議会議員ポウ・ピセス氏と現場訪問先の集合村の村長やキーパーソンを主賓に招いた。カンボジア国家を斉唱後、上記ピセス氏、主催団体である PADEK 代表のカンナロさん、AHI 側担当者宇井、その後 3 日を共にするチュム・メイ氏より挨拶があった。

1) 開講の辞：PADEK 代表 ケップ・カンナロ

PADEK 代表カンナロさんより、主催団体を代表して、主賓と参加者への歓迎の言葉、および今回この国際ワークショップを元戦闘地域であるシェムリアップで開催できることへの喜びが述べられた。また、カンボジアの歴史を背景とした PADEK の活動の変遷と、どのように地域づくりに関わるすべての活動に平和づくりの視点を取り入れていったのかが話された。特に、集合村（コミューン）単位での紛争解決委員会づくりを通してそれを進めていったこと、またそれは、政府の方針に沿いながら、単に復興への道筋を作るということのみならず、過去の悲劇をくりかえさないために人々の平和への意識を高めていく、信頼に基づく人間関係の回復を目指して行われたことが強調された。

<挨拶全文 和訳>

ご出席いただいた皆様！今日は PADEK、また私自身、カンボジアで国際ワークショップを開催する機会をもつことができ、大変に名誉なことだと思っています。このワークショップの主な目的は、各自の開発活動を共有しお互いから学ぶ事、とくに方法論の結集、またどのようにして平和づくりが健康問題と並んで行えるのかということ、PADEK の活動地域のひとつシェムリアップで行っている地域開発のあり方を考え共有することです。

この場をお借りして今回のワークショップに参加していただいた方々を紹介します。参加者は合計 25 名で、フィリピン、インドネシア、ネパール、東ティモール、日本、カンボジアからお越しいただきました。またこのワークショップは、AHI の協力を得て開催する事が出来ました。PADEK と AHI はこのワークショップを 2008 年から計画していましたが、世界的な金融危機によりまして持ち越されておりました。本日、AHI と PADEK が過去 4 年間計画してきた事が、やっとここで実現することができました。

30 年もの間続いたカンボジアの内戦は、社会的また物理的に、人的資源や社会基盤といったすべてのものを破壊してしまいました。しかし王国政府の賢明なリーダーシップもあり、過去数 10 年でこの社会、特にインフラ、人々の生活、社会経済の分野において目覚ましい変化を示す事が出来ました。それらの要素は、平和と政府の政策状況の安定性によって維持されています。平和の存在は、世界中のたくさんの旅行者にカンボジアを訪ねてみたいという魅力を与えます。

カンボジア政府は、NGO 団体に農村地域が直面している問題に関する対話を保持できるようにすることで、直接地域社会と活動する機会を与え、市民社会、国家および国際的なスペースをつくりだしています。PADEK はその NGO 団体の中の一つで、カンボジアの人々が食品衛生問題に直面していた 1986 年に活動を始めました。ここ数十年間の社会経済の発展に基づいて、人々の調和をもとに平和、繁栄と共に社会の構築を通じて地域社会と連携する方法を探求しています。さらにここ数年は紛争解決、平和づくりを地域社会における開発活動のなかに追加しました。このプロジェクトは、平和的な方法で紛争を解決する、または、最終的に暴力や地域の共同体意識の破壊、社会的不安定の原因を引き起こす対立を防ぐために地域を支援することが目的です。

国内外の参加者が、自分たちの国または活動地域に戻ったときに実践できる可能性のある活動を考えるこの平和に向けての地域社会の経験と知識を共有する国際ワークショップを、AHI のサポートを受けてここに開催できることは PADEK にとって大変名誉なことです。平和づくりと紛争解決の統合は政府の “No peace no Development” (開発なくして平和など起こり得ない?) というモットーに沿っているものです。

私はこの場をお借りして地方当局からの許可と、8 日間のワークショップの予定をお伝えしたいと思います。まず 4 日間は教室でそれぞれの経験を交換する時間、1 日はアンコールワット・ポルポト時代の虐殺に関する史跡訪問・PADEK の事務所訪問、2 日は PADEK の活動地域バリントアンコールチュムへの訪問、そして最終日にはこのワークショップの総括と、PADEK への新しい活動揭示・変更の提案を話し合う場を設けたいと思います。

もう一度 PADEK と私に代わって、今日の地域保健と開発を通しての平和づくりに関する国際ワークショップの歓迎会に出席してくれた皆様に心から御礼申し上げます。すべての参加者の皆さんを歓迎したいと思います。そして、PADEK が組織しているこのワークショップをサポートしてくれた AHI にも感謝を申し上げます。みなさんお越しいただいてありがとうございました。この研修が充実したものになる事を願っています。

2) AHI 紹介、国際ワークショップの目的説明：AHI 宇井

AHI を代表し、宇井より挨拶があった。最初にカンボジア政府に対し、長年保健省やカンボジア国内の NGO と協働する機会を得てきたことへの感謝が述べられた。また AHI の紹介として、1980 年に設立され、日本の市民によって支えられている団体であること、また海外に事務所をおかず、現地の協力団体とともにアジアでの活動を行ってきたこと、またその AHI の参加型研修は 24 時間毎日が学びという設定で行われること、などが話された。

<挨拶全文 和訳>

AHI に代わりまして、私からごあいさつ申し上げたいと思います。最初に日本で起こりました大地震と津波の被害にあわれた方々へのお気遣い、そして、日本を何とか救おうと努力していただき誠にありがとうございました。みなさまの行動は私たちにとどいております。ありがとうございました。

次に AHI について少々お話しさせていただきたいと思います。AHI は 1980 年に設立されたアジアの人材育成に取り組んでいる日本の NGO です。設立されてから今日まで、毎年、日本の会員・寄付者の方から、それぞれの方の誕生日に寄付金をいただき、その資金で活動しています。また私たちは、その資金をもとにして日本やアジアのいくつかの国で育成プログラムを実施しています。

AHI は日本国外に事務所や現地スタッフはおりませんが、いくつかの現地（日本国外）の団体と提携して活動しています。現在カンボジアでは 4 つのパートナー団体があります。1 つ目は、保健省保健推進センター (NCHP) です。1989 年の内戦の時、地方自治体の保健医療従事者を対象とした研修を提供するパートナーになりました。2 つ目は MEDiCAM (保健分野 NGO ネットワーク) です。2003 年から地方の NGO ワーカーのキャパシティビルディングのためにも活動してきました。3 つ目は、バットアンバン州の地元 NGO カンボジア青年開発センター (CYDC)。2010 年から協働事業をしています。4 つ目に、同じく 2010 年から PADEK とパートナーシップを組み草の根の平和構築に関する研究を行い、本日、その課題に関する国際ワークショップを開催することになりました。

過去 30 年間で、合計 6,000 人の NGO ワーカーが AHI のプログラムに参加しました。その多くが各国でのプログラムの参加者です。また約 600 人、つまり 10 パーセントの方が日本で開催する国際研修に参加しました。私たちはこの方達を “AHI 元研修生・元研修参加者 (ALUMNI)” と呼んでいます。

AHI にはアジア全域にたくさんの頼りになる元研修生がいます。カンボジアには約 40 人の元研修生がいます。AHI は 2000 年から、元研修生の能力を最大限に発揮し、彼らの中のネットワークを強化できるように、元研修生に継続的な学習の機会を提供する活動に強化し始めましたその元研修生へのプログラムの一つが国際ワークショップです。私たちの国際研修は基本的に NGO ワーカーが対象で、日本で 5 週間開催し、英語が使われます。

ですが、この国際ワークショップは、国際研修とは異なる以下の特徴があります。それは、元研修生とそのパートナーがチームで参加するものであり、彼らの共通課題がテーマとなること。現場訪問も行い、経験を共有します。英語だけでなく多言語が使われます。また、元研修生の団体とその地域のパートナーが共同で主催するものです。今回は、RADEK と、地域でともに活動する地域組織が協力してくれました。

英語を話せる NGO ワーカーだけでなく、その NGO ワーカーたちが地域でともに活動する、地域組織や地方行政のパートナーたちにも、国際的なレベルで学ぶ機会を提供するのが、この国際ワークショップです。ここでは、AHI の元研修生はただ学ぶことだけではなく、パートナーの学習を促進することも重要な役割となります。これも特徴の一つでしょう。

過去には、バングラディッシュ、インド、フィリピンでは2回 AHI の国際ワークショップが開催されました。そして今回がカンボジアではじめての機会です。私たちは PADEK が“是非カンボジアで”と声をあげ、この取り組みを行ってくれたことをとても嬉しく思っています。それは3年前のことでした。カンナロさんと私が“カンボジアで何を広め他の国に貢献できる”のかを話し合っ、地域の健康と開発を通しての平和づくりというテーマを設定しました。

一昔前、カンボジアはどちらかと言ったら学ぶ側の立場でした。そして、カンボジアの人たちはよく他の国の経験から学び、他から手助けをしてもらいたいと言ったものでした。しかし今のカンボジアは、過去の経験から他国の紛争後の地域再建を手助けすることができる立場にいます。

AHI のモットーは“自立のためのわかちあい Sharing for Self Help”です。また、私たちはいつでも、どこでも、誰からでも学ぶことができます。それをこのワークショップで感じ取ることができる事を願っています。この素晴らしい意見交換の場に、私たち AHI をご招待していただき誠にありがとうございました。

3) 祝辞：ポウ・ピセス氏（シェムリアップ州議会議員）

<要約>

カンボジアは、過去30年の間に何度も紛争を経験してきた。それゆえに発展も遅れてきた国である。しかしこの20年間は目覚ましい発展を遂げている。特に地方におけるグッドガバナンスは、政府の4つの基本方針の一つとして進められている。今、地方での全住民の参加促進を目指して NGO 法も制定されつつあるところであり、各州では、女性と子どもに焦点をあてた年間計画を立てている。各州の議会は、5ヵ年計画と3ヵ年の実施計画の策定にあたって、市民セクターや地域、そして NGO など様々な関係者の参加を進めるまでになっている。平和には2つの概念があると考えている。一つは個人個人の心の平和。そして二つ目は、社会の平和である。この二つの平和が得られなければならない。私たち一人ひとりが心に安寧を得られれば、家族が、そして社会もまた平和になってゆく。こうして平和が達成されたときにこそ経済も発展するだろう。しかし残念ながら、カンボジアにはまだそのような平和は訪れていない。このワークショップがカンボジアの平和の歩みに寄与するであろうことを心から期待している。

海外からの参加者の皆さんには、シェムリアップを訪問して下さったことを非常に嬉しく思っている。シェムリアップは、2011年に地雷に関するオタワ条約、ユネスコサミット、そしてアジアサミットの開催受け入れを控え、国際的な町のひとつになろうとしている。そのシェムリアップをぜひ、楽しんでほしい。

最後に、シェムリアップの住民を代表して、この度の日本の震災の被害にあわれた方々に心よりお悔やみを申し上げる。

■自己紹介とオリエンテーション（PADEK カンナロ）

参加者全員で自己紹介（名前、ニックネーム、役職、組織の名前と簡単な説明）、名前を覚えるゲーム（カンナロ・宇井）を行った。前夜に加え、より詳しくお互いのことを知った。

1) Basic Questions/期待

宇井が国際ワークショップ開催の理由および再度 basic questions と期待について説明した。参加者は期待を見直し、翌朝までに basic questions を考えてくるように言った。翌朝、basic questions は承認され壁に貼られた。(P13 参照)

2) ワークショップの日程と内容の最終化

国際ワークショップの目標の再確認を行い、参加者からの提案や懸念を組み込み、全員でワークショップの全日程と内容の最終化をした。日々の時間割も下記のように決めた。

朝食：6時半から7時半

午前の部：8時から12時

午後の部：2時から5時半

午後の部

■ワークショップ進行・生活等に関する基本ルール決め (AHI 宇井)

書類(部屋割、basic questions、参加者の個人情報、質問票、事例発表に使う資料、PADEK 沿革)を配布し、一日の始め方・終わり方、グラウンドルールを、ブレインストーミングを交えて話し合った。参加者が決めた項目は以下の通り。

一日は早禱か黙禱で始め、その日のセッションのフィードバックで終わる。

基本原則

- 元研修生はチームメンバーを補助する
- 時間を守る
- 携帯電話をマナーモードにする
- 大きな声で話す
- 積極的に参加する

日々の司会(参加者で分担)の役割

- 早禱とエクササイズをリードする
- 朝のセッション開始前に、前日のセッションの要点を発表する
- セッションのおわりに、その日の評価とフィードバックの時間の司会をする
- アイスブレイクやリフレッシュのためのゲームを行う
- タイムキーパーになる
- ディスカッションの司会を行う

■平和構築の基本概念 – 導入ワークショップ (AHI 清水)

会場に糸を伸ばし、片方の端を0%、中央を50%、反対側の端を100%として、以下の質問についてどのくらいのパーセンテージにあるかを考え、その位置に立ってもらうよう指示した。

1. あなたの国や地域はどれくらい平和ですか？

(参加者が立ち上がり、糸を持ち、彼らの国の平和レベルを示した。)

- ネパールは50%以下。理由として、殺害や誘拐が頻繁に起こっていることを挙げた。
- ティモールは50%。理由として、人々が未だにインドネシアに避難していることを挙げた。
- 日本は50%。日本の平和レベルは国際ワークショップに参加している国々と比べて、高くなると思われていたが、ひとつに自殺率が高いことを理由に挙げた。
- カンボジアは60%。
- フィリピンは60%。理由として、戦争がなくなっても、地域内の平和を維持できていないことを挙げた。
- インドネシアは % (記録なし) だった。理由として、近隣トラブルを挙げた。

2. あなた自身はどのくらい平和だと感じていますか？

各自位置にたち、参加者同士で質問やディスカッションを行った。特に日本の状況について質問があった。

最後にこのゲームからの学びのまとめとして、平和は個人、家族、地域、国、世界中で作り始めることができること、平和は個人から作り始められるという点が話された。

- 宇井さんが、このセッションの目的は参加者一人一人にとって平和が何を意味するのかを見出すことだと述べた。
- カンナロさんが、参加者全員にそれぞれの地域や国に共通の平和の概念を持ってほしいと述べた。彼はまた、日本からの参加者は心の平静を保っているのに、日本がなぜ50%なのかに興味深いと話した。

■平和構築の基本概念 – PADEK の平和構築の概念(PADEK カンナロ)

PADEK では、平和や平和構築は、戦争についてのみ言及するものではないと考え、「平和な社会とは、社会的、政治的、経済的環境が整っていて、人権や法律が尊重され、人が中心となっている社会である」と定義している。

先進国の中には全ての平和がそろっていない国もある。例えば、日本は豊かな国だが、100%平和ではない。社会的混乱、自殺、誘拐、殺人が日々起こっているからだ。

カンボジアでは権力を持った政府の役人による土地の横領が主要な課題であり、自然資源管理は政府の手に負えず、少数の人々が利益を得ている状態である。NGOの職員として、地域内でこの問題をどのように解決することができるか？カンボジアは30年にもわたる長期的な戦争を経験し、このシェムリアップでも戦闘が行われ、貧困や人々の不信感をもたらした。一度壊れた信頼の回復は非常に難しい。そこで、私たちは平和づくりを家族間の信頼づくりから始めている。NGOが政府に反対するために、人々を教育していると言う人もいる。しかし、PADEKはその土地の人々の能力を育成している。人材が養成されなければ、地域は発展できないからだ。

宇井さんがディスカッションで挙げられた様々な平和構築の側面をまとめた：

- 精神的
- 人間の安全保障
- 社会的、政治的、経済的環境
- ベーシックニーズ（経済開発を重視した従来の援助ではなく、低所得層の民衆に直接役立つものを援助しようとする援助概念。衣食住など、生活するうえで必要最低限の物資や安全な飲み水、衛生設備、保健、教育など、人間としての基本的なニーズ）
- 教育
- 消極的、積極的平和
- 人権
- 信頼醸成
- 個人/家族

デデットさんが付け加えた：

- エンパワーメント（個々人が自覚し、自己決定能力、経済的・社会的・法的・政治的な力をつけ、能力を発揮していくこと。自己決定権をもつようになり、連帯して社会的不平等などを克服していくことにつながる）
- 人々が自分の権利や裁量を知っている
- 彼らが権力のある人々との戦い方をよく知っている
- 人々が基本的人権について理解している

優子さんが述べた：

- 目に見えない戦争もある

引き続き、カンナロさん・宇井さんが、参加者が活動している地域で平和づくりをすすめるための、平和や平和へのアプローチについて説明を続けた（次ページ参照）。

***平和づくりの基本概念：アクターと戦略（カンナロ）**

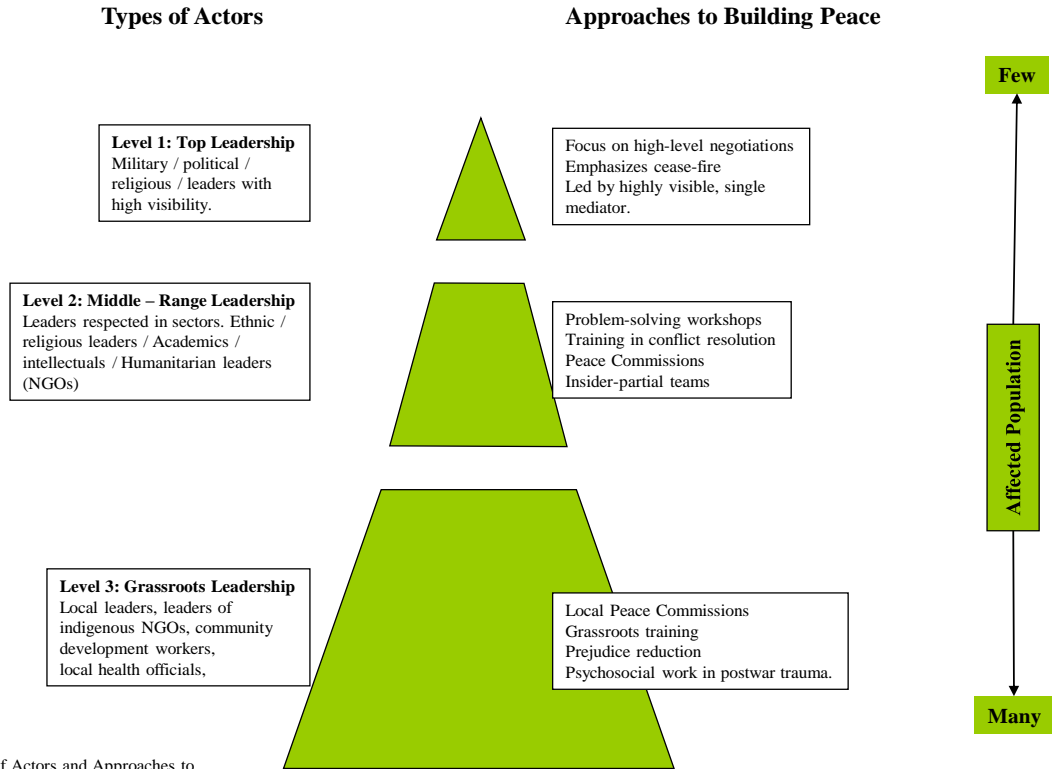
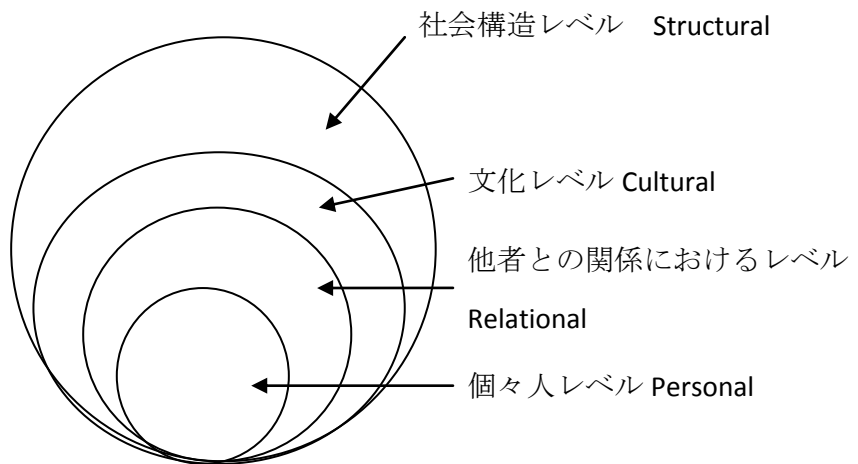


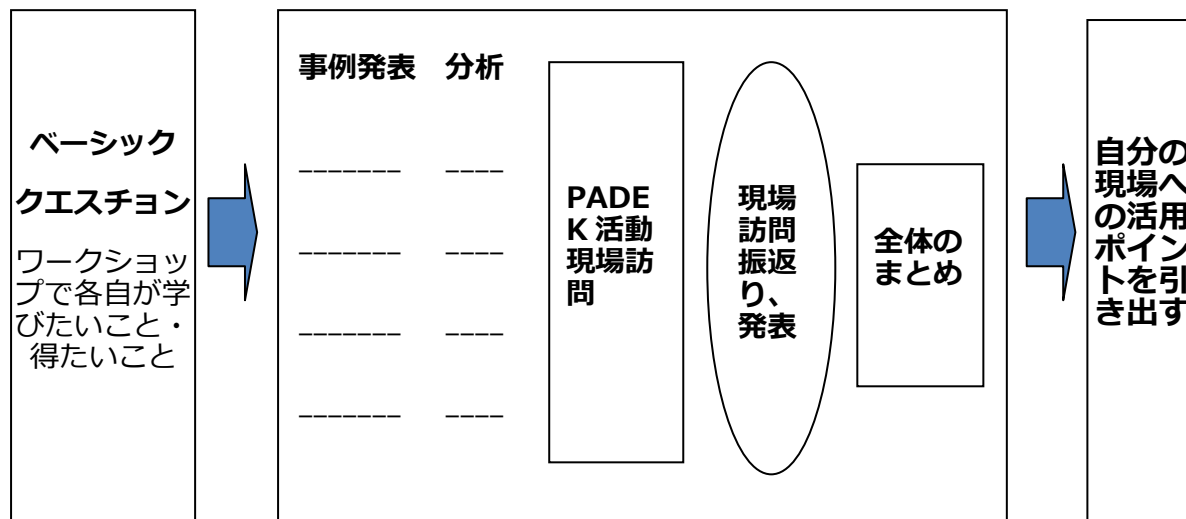
Figure Types of Actors and Approaches to Peacebuilding (Lederach, 2004)

***平和づくりの基本概念：変化のレベル（宇井）**



このセッションを通じて、参加者はこのワークショップの基礎となる、平和づくりの共通概念を持った。そして、このワークショップで使用する分析の枠組みを紹介し、壁に貼った。

その後、宇井さんがワークショップの全体的な流れを図を用いて説明した（下記）。毎日参加者がその中のどこにいるのかを確認するために、その図も壁に貼られた。



■事例分析の導入およびオリエンテーション（AHI 宇井）

事例を分析する導入として、現代の紛争の本質について紹介した：

- 資源ベース紛争、経済力や自然資源へのアクセスを得るための競争
- 権力闘争、政治権力や政治的な参加を得るための競争
- 思想ベース紛争、対立する思想や価値観の間の競争
- アイデンティティベース紛争、対立する民族や宗教等の共通のアイデンティティを持った人々の集まりの間にある、政治的や経済的な力と社会正義をめぐる紛争

次に、事例発表のガイドラインを説明した。

各チームが国、組織の概要、平和づくりに関係する活動事例に焦点をあて活動を発表する。詳細はワークショップ前に参加者に送られたガイドライン（付録6）を参照

■カンボジアの概観、歴史、背景（PADEK コサール）

カンボジアの歴史と内戦の本質を発表し、他のカンボジア人の参加者が情報を付け加えた。（付録7参照）

このセッションは特にカンボジア国外からの参加者が、カンボジアの歴史や紛争の背景への理解を深めることに役立ち、PADEKの現場訪問を含めたカンボジアの事例への理解と分析の助けとなった。

■アンコールワット、虐殺被害者慰霊塔見学、PADEK シェムリアップ事務所訪問（PADEK スタッフ）

参加者は虐殺被害者慰霊塔（チュメイ寺院）、アンコールワットとバイヨン寺院を見学した。目的はカンボジア国外からの参加者がカンボジアの虐殺の歴史と、カンボジアの文化を学ぶことである。専門のガイドおよびカンボジア人の参加者が随時説明を行い、カンボジア人の苦しみや喜び、そして自国の文化に対するカンボジア人の誇りを感じ、学ぶことができた。

■平和づくりへの思いの共有（PADEK カンナロ・AHI宇井）

フィリピンチームが前日のセッションの振り返りを行った。

その後、参加者は3分で、自分が平和づくりのために働くきっかけとなった出来事について、1つか2つの絵を描くことを求められ、平和づくりへの思いや動機を、自分が書いた絵を使って説明した。

- カンボジアの地図が戦闘地域を表していた。虐殺によって殺された人々の頭蓋骨を見た。それが、私が平和構築に貢献したいと思ったきっかけだ。
- 内戦によって私の家族はバラバラになり、カンボジア人同士の争いもたくさん目にした。どうしたら平和づくりに貢献できるのか？そして私は平和構築活動をしている NGO で働くことに決めた。
- 地方に住む人々の間では争いやもめごとは暴力や力で解決されていた。私は、彼らに戦うのではなく、平和的な方法で問題を解決してほしいと思った。
- 平和は地域の発展を促進する。一度紛争が起こると、その地域の住民はその後何年も苦しむことになる。
- 国外に行くため家族と一緒にビザをとりに行った時に、近くで爆発が起こった。血を流している少年を見つけ、ビザをとるのをやめて彼を病院に運んだことがきっかけになった。そして今も国内で活動し続けている。
- 内戦によって、たくさんの人が毎日殺されるのを見た。
- 自分の地域で悪いことがたくさん起こった。だから、このワークショップに参加して、参加者から学ぼうと思った。
- たくさんのカンボジア人が内戦によって貧しくなり、国を発展することではなく、他人に勝つことしか考えなくなった。
- 私の地域には平等が存在しない。平和こそ平等を生み出す。
- 戦争のある世界は何かがおかしい。私は平和づくりに貢献することで、よくなった世界を見たい。
- 私の人生には戦争ばかりで、家族も失った。もう繰り返したくない。
- 幼い時に暴力を受け、家出したのが一番の動機だ。
- 内戦のせいで問題を抱えている人々をたくさん見た。

- 長期にわたる内戦によって、家庭内暴力や人々の中の諍いなどの問題がたくさんの問題が生み出されてしまったのを見てきた。
- 広島に原爆が投下されたことによって、たくさんの方が命を落とした。私は人々が命を落とすところをみたくない。自分の平和にむけてとりくみたい。
- 平和は大切だと知り、自分や家族、近所から始めるべきだと思った。平和は開発に欠かせない要素だ。
- 私は涙を流し、苦しんでいる難民を大勢見た。彼らを家に帰してあげたいという思いが平和づくりに向けて働くことに繋がった。
- 誰かに何かをしてあげたいと思える気持ちをもつことで、自分の心に平和が宿る。それが平和の始まりだと思う。
- 平和なしに地域づくりはできない。
- 家族が誘拐されたこと、貧困によってそのような汚いことをしなければいけない人がいるということ。私は健康で平和に過ごしている人々を見たい。平和という大きな木の元で、人々が暮らす姿を見たい。
- カンボジアではたくさんの地雷が残っている。また HIV/エイズの問題もある。

参加者はこれまでの人生を交えながら、平和づくりに関わる思いを共有した。中には、話が止まらない人や、涙を流しながら聞く人もいた。この共有によって、参加者はお互いの背景や関心をよく理解することができた。また、平和づくりに関するディスカッションが促進され、参加者の一体感を高めた。

フィリピンチームからの平和の歌で、この日のセッションは終了した。

- ・ オプションセッション：カンボジア国外参加者のためのクメール語講座（15分間）
（PADEK ソクンティア）

■朝のセッション

- ・ カンナロさんが全ての参加者に何か困ったこと、感謝したいことはないか尋ね共有した。
- ・ セッションの見学に来たコミューン長 4名の紹介：
タソムのコミューン長 **Bean** 氏、スヴァイソールコミューン長 **Chhly** 氏、プラサットコミューン長 **Kang** 氏、スヴァイルーコミューン長 **Lina** 氏。この4コミューンが現場訪問の受け入れに協力する。
*コミューン（集合村）：カンボジアの地方行政には、州、郡、コミューン、という3つの行政区分がある。
コミューンは人口1万5千人から2万人。一つのコミューンにつき、通常およそ8~10の村がある。

■前日のふりかえり

ポリンさんがワットチュメイにある虐殺被害者慰霊塔、平和構築へのモチベーションの共有、PADEKのシェムリアップ事務所に関する質問を出し、前日のふりかえりをした。

- 虐殺被害者慰霊塔の見学から何を学んだか？
 - ーネパール人とインドネシア人の参加者より、頭蓋骨や骨が火葬や埋葬されずに展示されていたことについて、自分たちの文化では理解しがたく、またなぜそのまま見えるようにしているのかについて質問があった。カンボジアの参加者より、悲劇の実態を語り継ぎ、平和についてとりくむためだと答えがあった。
 - ー東ティモール人の参加者は、カンボジアの状況が東ティモールに似ていると言った。東ティモールでも近隣住民が殺し、争い合っていた。
- 平和づくりに関する参加者の話を通して、どのような印象を受けたか？
 - ーフィリピン人の参加者より、NGOとして地域に平和をもたらすために一生懸命働くべきと改めて感じたと言った。
- PADEKのシェムリアップ事務所の印象についてコメントを出し合った。

■事例発表

事例1：ナグディラブ財団、平和構築プロジェクト（フィリピンチーム）

発表のハイライト

1. フィリピンについて
2. バシラン州の人口
3. 人種差別
4. 暴力と沈黙の文化

5. 政治
6. 反応
7. ナグラディーブについて
8. ナグラディーブのプロジェクトとプログラムについて
付録8を参照のこと。

バジラン州はミンダナオ・ムスリム自治区のひとつ；大多数はイスラム教徒（65%）で35%がキリスト教徒もしくは地元の宗教。中央政府からの支援がないため、この州は財政上の問題を抱えており、プライマリヘルスケアや教育、インフラ設備にも十分な予算がない。

*プライマリヘルスケア：地域社会に住むすべての人が、その発展の程度に応じた負担で身近に利用でき、科学的に適正で社会的に受け入れられているやり方による、人々の暮らしに欠くことのできない保健医療。①健康教育、②食料の供給と栄養状態の改善、③安全な水の供給と衛生管理、④母子保健（家族計画を含む）、⑤予防接種、⑥地域に蔓延する疾病の予防とコントロール、⑦一般的な疾病と傷害の適切な治療、⑧必須医薬品の供給の8つの要素から成り立っている

- 地域の課題
 - 暴力の文化
 - 青少年の就学機会の少なさ
 - 誘拐
- ガバナンス上の問題：
 - 説明責任と透明性の不在
 - 政治的意思の不在
 - 受け身の国民
- 問題に対するナグディラーブとしての対応
- ナグディラーブの使命
- 人間の安全保障

休憩後、アイスブレイクとして PADEK のサムロットさんが輪ゴムとストローを使ったゲームを行った。ゲームの後、参加者はフィリピンチームの発表に対して質疑応答を続けた。

質問：平和づくりをどのように自分たちの活動に取り入れているのか？

答え：村保健ボランティアを通して行っている。

質問：反乱軍と協力する際、政府は NGO 職員としてのあなたをどうみるのか？

答え：反乱軍はすでに政府と和平協定を結んでおり、問題はない。

コメント：2500人が受益者であると紹介されているが、その生活状況のにどのような変化が起きているか？

答え：プロジェクトは始まったばかりなので、データが揃っていない。

質問：地方の政府や軍をどうやってプロジェクトに関わらせているのか？

答え：私たちは、中央・地方などの全てのレベルにおいて良い関係を保っており、地方の権威的な立場な人や機関には常に情報を送っている。

質問：どのタイプの紛争といえるか？

答え：資源争いや価値観、汚職をめぐる紛争であると考えます。

ファシリテーターが「フィリピンチームの発表から何を学んだか」について聞いた。参加者はそれぞれの事例の後に紛争の本質をまとめることで一致した。

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
<ul style="list-style-type: none"> - 政治 - 資源ベース - アイデンティティベース 	<ul style="list-style-type: none"> - 基本サービスの欠如 - 資源の不公平な分配 - 基本ニーズの不一致 	<ul style="list-style-type: none"> - 政府高官 - 地域住民 - 宗教指導者 	<ul style="list-style-type: none"> - 研修、祈祷、政策提言 - 平和キャンペーン(平和文化ワークショップ) - 平和と紛争のインパクト評価 - 人間の安全保障アプローチ - 異宗教間の会合 - 地域の組織化と子どもの教育 - 開発活動における平和の主流化 - 利害関係者間のパートナーシップ 	<ul style="list-style-type: none"> - 政府との良好な関係と情報共有 - 基本ニーズの不一致による紛争 - 兵器のリサイクルによる平和の象徴づくり 	

事例 2：鍼を通した平和づくり（インドネシアチーム）

インドネシアチームが会議室の壁に貼られた写真やポスターをみせながら事例を発表した。

発表のハイライト

- 鍼研修のプログラムと活動
- 3つの NGO 間の連携協力
- 鍼がどのようにキリスト教とイスラム教の和解を生み出しているか
- ングディ・ワラズ（東洋医学療法士）の活動

質問：3つの NGO の関係は？

質問：なぜ地域住民は近代医学ではなく、伝統医学を信用しているのか？

質問：伝統医学に免許はあるのか？

質問：なぜ鍼に頼るのか？

質問：課題は何か？

質問：鍼研修の参加者は？

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
- アイデンティティベース（誤解）、個人間の争いから宗教間の紛争 - 経済資源ベース	- 政府が住民にサービスを提供していない	- 地域の東洋医学療法士 - 宗教指導者 - 政府の役人	- サービスの提供 - 東洋医学療法研修 - ロールモデルとしての宗教指導者 - 政策提言のためのメディアの活用 - 良い文化的習慣の推進 - 良い宗教的慣習の推進 - 実用的な技能訓練	- 宗教指導者を通しての異教徒間の平和づくり - 「つなぐ」人としての保健ボランティア - 地域住民による紛争解決	- 地方の権威の関与 - 政府からの支援 - 持続性

事例3：Liquisa 郡と Lautem 郡における地域保健ボランティア育成と衛生向上プロジェクト（東ティモールチーム）

発表のハイライト

- 東ティモールの歴史
- 東ティモールの政治体制
- 事例発表
- 紛争の状態 — 問題と課題

付録9を参照のこと。

質問：平和づくりにおいて、女性の参加をどのように促しているのか？

答え：水や衛生のプログラムに女性が参加しており、保健ボランティアのほとんどは女性である。しかし、プロジェクトはジェンダーが中心ではない。

質問：東ティモールの国旗に武器が描かれている。暴力を象徴しているように感じるが。

答え：これは独立に向けて、戦いを通じ自らの手で得たことへの象徴である。

質問：地域住民は今でも伝統療法に頼っているか？近代医学は入ってきているのか？

答え：以前は伝統療法のみ relied していたが、今では、それでも良くならない場合は村長が病院につれていく。

質問：行政の事業とあなたの団体のプロジェクトとをどうつなげるのか？

答え：行政の保健セクターとは日頃からよい関係を築いており、協力関係にある。

質問：紛争が起こった時、それを解決する法や制度はあるのか？

答え：東ティモールは独立したばかりで、法制度については未整備の部分が多い。

カンナロさんが以下の質問を参加者に尋ね、東ティモールの発表をまとめた。

この発表から何を学んだか？

- 地域の紛争解決において、伝統的な方法やその土地の知恵は有効な手段である。
- 平和はもろい。
- 住民への平和づくりについての理解と意識向上が必要である。

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
<ul style="list-style-type: none"> - 政治ベース - 資源ベース - 思想ベース - アイデンティティベース 	<ul style="list-style-type: none"> - 貧富の差（資源の点から） - 政治運動によるイデオロジー教育 - 資源の不公平な分配 	<ul style="list-style-type: none"> - 宗教指導者・伝統的指導者 - 村長 - 退役軍人 	<ul style="list-style-type: none"> - 政府との連携 - 保健委員会の設置 - 農民同士の交流 - 持続性にむけた能力育成 - 組合づくり - 村の保健ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> - 伝統的な方法による紛争解決 	<ul style="list-style-type: none"> - 組合活動と保健活動の統合 - 軍事政権に操られないように人々を教育する - 住民のエンパワーメントと意識向上 - 平和づくりとの統合

事例 4：地域保健フォーラムを通しての平和づくり（MEDICAM、カンボジア）

発表のハイライト

- 地域保健フォーラムとは何か、その目的
- 開催までのプロセスと開催実績
- 地域保健フォーラムの参加者
- 地域保健フォーラムであげられた共通の問題
- 地域保健フォーラムからの学び

付録 10 を参照

質問：どのように地域保健フォーラムであげられた課題を政策に反映させているか？

答え：最終的には、国レベルの保健政策担当者へあげるところまでもっていく。

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
<ul style="list-style-type: none"> - 政治ベース 	<ul style="list-style-type: none"> - 不公平な健康 	<ul style="list-style-type: none"> - 行政の医療従 	<ul style="list-style-type: none"> - NGO とのパー 	<ul style="list-style-type: none"> - 現在の政策に 	<ul style="list-style-type: none"> - 地域保健フォ

<ul style="list-style-type: none"> - 資源ベース 	<p>サービス制度</p> <ul style="list-style-type: none"> - 住民が声をあげる機会がない - 経済資源ベース - 制度が機能していない 	<p>事者（州・郡の保健局や保健センターの職員）</p> <ul style="list-style-type: none"> - 政策立案者、地方の権威（州保健課） - 地域住民（患者、利用者） 	<p>トナーシップによる地域保健フォーラム</p> <ul style="list-style-type: none"> - メディアの活用 - アクター間での会合 - 各レベルの行政職員の巻き込み - 事前・事後調査 - 住民の意見や権利の主張の促進 - NGOのネットワークによる政策提言活動 - 行政職員への公僕としての倫理や最新政策に関する教育 - 行政や国際NGOとの連携促進 - 地方・国・国際各レベルでの政策提言と意識向上活動 	<p>対する個人の姿勢の変化</p> <ul style="list-style-type: none"> - 政策提言の重要性 	<p>ーラムでの決定事項のフォローアップ</p> <ul style="list-style-type: none"> - 地域のリソースによる地域保健フォーラム開催の常設化と普及 - 行政と人々間の信頼醸成
---	--	--	---	---	--

事例 5：市民の平和運動（2004-2008）（大熊、日本）

AHI の活動紹介の後、日本の平和に関する課題と 2 つの市民活動について紹介された。

発表のハイライト

- 日本の基本情報
- 社会的、経済的な特徴
- 地方分権化政策
- 行政区域
- 市民の平和運動
- 戦略
- 達成
- 課題

付録 11 を参照。

質問：日本の平和にグローバリゼーションはどのような影響をもたらしたのか？

答え：貧富の差が拡大した。政府は安全保障に重点を置くようになり、保健のような基本的なニーズに目を向けなくなった。

質問：日本の平和づくりの活動にイスラム教徒も関わっているか？

答え：日本におけるイスラム教徒の割合は少ないが、あるイスラム教徒のグループがイラク戦争反対運動に参加していた。

質問：なぜ日米安全保障条約に抗議し、米軍を日本から追い出さないのか？そのような運動はないのか？

答え：抗議している人もいるが、大多数の人、特に米軍基地から離れたところに住んでいる人々は政府の決定に受け身でこの問題に関心がない。もう一つの問題は米軍基地のある地方自治体が巨額の補助金を受けとっており、地方経済が米軍基地と関連していることである。

質問：なぜ日本は未だに北朝鮮や他の国を恐れているのか？

答え：憲法は日本が戦争することを禁止しているが、北朝鮮からの核兵器を恐れて、防衛力を強化すべきだと主張する人もいる。しかし、私は防衛力の強化は他の国の防衛力の強化を招くだけだと思う。

コメント：幼稚園で行われている”Second Step”というプログラムはとても興味深いアプローチだ。しかし、紛争の解決方法を学ぶ前に、子どもは教室内のおもちゃなどを共有することを学ぶべきだ。

■クメール・ルージュ政権下体験談：チュム・メイ氏(トゥールスレン強制収容所生存者)

このセッションは午後 8 時に始まった。目的はチュム・メイさんの体験を共有することであった。(なお、チュム・メイさんはクメール・ルージュのリーダーの裁判の法廷証人としてプノンペンで証言をするためこのワークショップには部分参加となった)

チュム・メイさんはクメール・ルージュ政権下の体験談を以下のトピックに絞って話した。

1. 自己紹介とクメール・ルージュ政権下の体験談
2. クメール・ルージュ裁判
3. クメール・ルージュ犠牲者救済のための正義、平和、和解活動
4. 犠牲者の正義のための団体クセム・クサンの設立
5. クセム・クサンを支援する他の NGO との協力
6. PADEK と AHI へ、国際ワークショップに招待してくれたことに対する感謝の意

生存者である当人から証言を聞いたことは、参加者全員にとって大変貴重な機会となった。また、参加者は重要なメッセージを次の世代に託すために、彼自らつらい記憶を話してくれたことに感謝した。

- ・ オプショナルセッション：カンボジア国外参加者のためのクメール語講座（15 分間）
（PADEK サリック）

■朝のセッション

インドネシアチームが早祷と前日の振り返りを行った。その後、カンナロさんがスケジュールの変更を伝えた。参加者は「ヒロシマ・ナガサキ」のDVD鑑賞を3月27日に変更することを決めた。

■事例発表

事例6 日本の発表の続き（清水 AHI 日本）

発表のハイライト

- 広島への原爆投下の経緯と実態、その後の影響について
- 日進市民による平和づくりのとりくみ事例
- 広島市民による平和づくりのとりくみ事例
- 課題と今後に向けて

付録12を参照のこと。

質問：核爆弾で苦しんだのに、なぜ日本は未だに原子力による発電を行っているのか？

答え：政府によって定められた国家エネルギー政策によって、日本人は核兵器と原子力発電所はちがうものだと思うようになった。しかし、3月の事故から人々は両方同じように危険だということに気付いた。また、危険だと知っていても、ほとんどの人が原子力発電所がある地域の問題で、自分の問題ではないと感じている。全ての人々にとっての重要な問題だと気付いた今、変化のチャンスである。

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
<ul style="list-style-type: none"> - 政治的な紛争 - 環境 - イデオロギー - アイデンティティベース 	<ul style="list-style-type: none"> - 政治 - 壊された社会 	<ul style="list-style-type: none"> - 被害者 - 若い世代 - 地域住民/市民社会 - 地方自治体 - 教育課、学校 - 市の図書館 	<ul style="list-style-type: none"> - 次世代教育 - 海外教育 - 平和憲法に基づく教育 - 権利に基づくアプローチ(平和に生きる権利) - 教育課程への平和教育の導入（日々の課 	<ul style="list-style-type: none"> - 文書化 - 日常課題と平和課題とをつなげる - 日々平和について考える - 紛争は起こるもの。どう解決するかが大切。 	<ul style="list-style-type: none"> - 人々の無関心 - 核の危険性に関する知識向上 - 高齢者の増加 - 若い世代の自殺率の増加 - アメリカ依存

			題解決に 応ず るもの として) ・ 非核宣言 ・ 展示や コンサ ート ・ 子ども による 劇 ・ 核兵器 廃絶 ・ 子ども を平和 のメッ セン ジャー として 育成 ・ ボラン ティア 精神 ・ 情報 交換		
--	--	--	--	--	--

事例 7：カンボジアにおける参加型保健促進研修を通じた平和づくり（宇井 AHI 日本）

発表のハイライト

- カンボジアの社会的背景
- 保健促進研修
- 調査概要と結果
- ディスカッションのポイント：5つの促進要因
- 考察と学び

付録 13 を参照のこと。

質問：地域保健推進者の役割についてもっと説明してほしい。

答え：保健についての情報共有だけでなく、人々の共通課題である健康を達成するために、人々をまきこむことである。保健に関する仕事を通して、日常的に平和づくりに貢献することができる。その意味で、保健従事者は特別な強みを持っている。

コメント：発表は私が村開発委員会で働いていたときのことを思い出させてくれた。

カンボジアチームが発表にコメントを加え、信頼醸成が平和づくりの基本であると締めくくった。

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
・ 権力ベース ・ イデオロギーベース	・ 住民、とくに若い世代の教育不足 ・ 不公平な資源分配	・ 行政の保健従事者 ・ ポルポト政権時代の元衛生兵	・ 以前の敵との和解 ・ 保健研修 ・ 保健活動に平和づくりの要素をとりいれ	・ 信頼の回復 ・ 以前の敵から友人となるまでの導き方 ・ 個人同士から	・ 行政との連携

			<ul style="list-style-type: none"> - 参加型アプローチ - 和解の場の提供 - 平和の促進者としての保健ワーカー・トレーナー 	<ul style="list-style-type: none"> - 始める和解 - 共通課題である保健を入口とすること - 努力の継続の必要性 	
--	--	--	---	---	--

事例 8：地域保健ネットワークによる政策提言と保健政策づくりを通じた平和づくり（キムソーン、CYDC、カンボジア）

発表のハイライト

- CYDC の歴史、活動地域と対象者、理念と使命
- プロジェクトの背景と実施中のプロジェクト概要
- 地域保健ネットワークによる政策提言の事例
- 成果
- 戦略・手法
- 持続性にむけてのとりくみ
- パートナーシップとネットワーク

付録 14 を参照。

質問：地域住民をどのようにまきこんでいったのか？

質問：プロジェクトを実行する際の限界と課題は？

質問：若者のグループを作る際のむずかしさは何か？

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
<ul style="list-style-type: none"> - 経済ベース - アイデンティティベース - 政治ベース 	<ul style="list-style-type: none"> - 貧困 - 人権の欠如 	<ul style="list-style-type: none"> - 若者 - 母親・障害者 - 村保健ボランティアとそのグループ - 保健センター運営委員会 	<ul style="list-style-type: none"> - 地域保健ネットワークづくり - ローカルガバナンス（住民参加）促進 - 若者を地域ワーカー・リーダーとして育成 - 若者グループの連合体組織 - 持続性にむけて行政の枠組みにとりこむ - 若者のエンパワメント 	<ul style="list-style-type: none"> - 最貧困層に焦点 - 透明性と説明責任のモデルとしての NGO 	<ul style="list-style-type: none"> - その土地の権威の関与 - 若者への平和教育

事例 9：人民の民主主義への闘争の歴史（マノハー、SRCD、ネパール）

発表のハイライト

- ネパールの一般情報と多様性・歴史
- 民主主義運動
- 内戦の影響
- 地域の和解を進めるための SRCD の活動と成果
- その他の SRCD の主要な活動

付録 15 を参照のこと。

AHI 清水がネパールの発表のまとめを進行した。

発表のまとめ

紛争の本質	紛争の根本原因	関係者	戦略	学び	課題
<ul style="list-style-type: none"> - 政治ベース - イデオロギーベース - アイデンティティベース - 資源ベース 	<ul style="list-style-type: none"> - 不安定な政府 - 富裕層と貧困層の間の人権の格差とその恒常化 	<ul style="list-style-type: none"> - 政党・政治グループ - 地域の指導者 - 地域の権威 - 地域のソーシャルワーカー - 宗教指導者 - 平和活動に参加した学生ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> - 地方から中央まで全レベルでの紛争解決研修 - 各レベルへのアプローチ - 被害住民同士の訪問 - 平和的デモ - NGO 間のネットワーク構築（声の集結） 	<ul style="list-style-type: none"> - 住民による意志決定 - 住民尊重 	<ul style="list-style-type: none"> - 人々の要求に答える行政をつくる - 異グループ間の信頼醸成 - ボランティアの安全確保 - ヒンドゥー至上主義

事例 10：PADEK の事例発表

地域住民の健康と開発を通じた平和構築（ソクハ カンナロ、PADEK、カンボジア）

PADEK の発表を聞く心構えとして、宇井さんが一日目に紹介したワークショップのフレームワークを参加者にもう一度説明し、このワークショップの目的の一つ、PADEK から学ぶことについて強調した。参加者は、PADEK の平和構築と地域住民の健康と開発を統合した戦略、行政やさまざまな組織と協働するという戦略への理解に焦点をあてることを確認した。また、翌日からの現場訪問で更に見て深めたいと思うポイントを各自メモした。その後、PADEK の職員 2 人が PADEK 総合地域開発モデル（PICDM）について発表した。

発表のハイライト

- PADEK の歴史、展望・使命・目標
- 活動地域と戦略
- 主要な活動
- 基本原則

具体的な事例：草の根レベルの平和構築プロジェクト
付録 16 を参照のこと。

上記に加え、カンナロさんが PADEK の働き方について、PICDM が縦（地域レベルから国レベル）も横（地域に関わる関係者）も結束することで、持続的に地域住民自身が活動を行うことを可能にしていると強調した。PADEK の原則は、①貧しい人々の暮らしの向上、②貧しい人々の能力育成、③組織形成による貧しい人々のエンパワーメント、④地元の権威が、貧しい人々の生活に影響する課題解決のために議論しとりくむ、の4点である。これらは PICDM を 5 年～6 年行い、段階的に達成していく。

質問：地域住民と信頼を築くために、どのようなアプローチをとったのか？

答え：最初に人々がどのような問題を抱えているかを知るために地域調査を行っている。特に、PADEK の職員たちは相互理解と信頼を得るため、地域住民と十分な時間を過ごす。

質問：紛争解決委員会とはどんなものか？

答え：紛争解決委員会は PADEK の育成したボランティアで構成する委員会のひとつで、地域内で起こったもめごとを解決し、また防ぐという役割がある。PADEK の全活動地域に紛争解決委員会が設置されている。

質問：PADEK はどうやって「貧しい人」と「極貧の人」を区別しているのか？

答え：貧しい人と極貧は 2 つの方法、①参加型農村調査法（農村地域のデータを収集し分析するのに用いられる手法。外部の専門家が現地の人々から情報を抽出するのではなく現地の人々自らが開発計画・その具体的内容・効果等を考え、実施する）と資産順位、②政府によって決められた貧困の基準（ID カード）、によって区別される。

質問：PICDM は、他の NGO の活動を参考にしたのか？ PADEK が独自で生み出したのか？

答え：PADEK 設立当初は、資金提供団体がそれぞれの領域に専門家を送っていたので、モデルや手法もばらばらだったが、その中で共通する成功事例を見出し、PICDM を作り出した。しかし、PADEK はドナー側の都合にあわせるのではなく、カンボジアの事情を考慮して働いている。

質問：自助グループ育成に直接的に関わるのは誰か？

答え：まずは、地域の課題を解決するために活動する地域ボランティアを育成する。彼らは地域住民自身によって選ばれる。教育を受けた若者も PADEK と働いている。

質問：地域ボランティアに長期にわたって働いてもらうための工夫は？

答え：PADEK の方針に基づいて、地域ボランティアには、その専門領域に関する技能を習得するための研修を行っている。それが彼らが働き続ける動機付けになっている。また、子どもの予防接種などの情報を広めるなど、村の集まりをまとめたりする経験も動機付けとなっている。

■PADEK 現場訪問オリエンテーション(サリック PADEK)

PADEK のシェムリアップ・チームのリーダーであるヘン・サリックさんが翌日からの現場訪問（3月25日・26日）のオリエンテーションを行った。彼はシェムリアップ・チームの背景を発表し、二日間のスケジュールを配布した。参加者は4グループに分けられた。付録17を参照のこと。

またカンナロさんより、現場訪問で住民にインタビューする際の質問事項が提案された。

参加者の学びを促進するためのガイディングクエスチョン：

1. あなたの地域にはどんな紛争があるのか？
2. どのようにその紛争を解決しているか？
3. 誰がその紛争を解決するのを手伝っているのか？
4. あなたはその解決方法に満足しているか？
5. PADEK はどのようにあなたの暮らしを改善するのを助けたか？
6. PADEK の働きに満足しているか？
7. 地域での平和づくりと紛争解決におけるあなたの役割は何か？
8. 平和づくりと保健・開発を統合する戦略が、どの程度、彼らの問題や紛争を解決しているか？

Day 5 現場訪問

2011年3月25日

現場訪問 1 日目。バリン郡への訪問。2 グループ (A1、A2) はプラサットコミュニティへ、2 グループ (B3、B4) はスヴァイ・ソールコミュニティを訪問した。

Day 6 現場訪問

2011年3月26日

現場訪問 2 日目。アンコールチュム郡のタソムコミュニティを訪れ、住民と会合を持った。ホームステイをし、夜には住民との文化交流プログラムも行われた。

Day 7 現場訪問ふりかえり・分析

2011年3月27日

■リアン・ダイコミュニティ(アンコールトム郡)の協同組合訪問

1995 年から PADEK の活動地となっているアンコールトム郡・ソムロン村の協同組合を訪問し、自助グループから始まった協同組合の活動と、体系化された参加型の協同組合の運営方法を学んだ。

協同組合が経営し、PADEK と国際労働機関 (ILO) が支援するコミュニティショップを見学し、販売員(協同組合員)と PADEK の職員から、コミュニティショップの背景や経緯について説明を受けた。協同組合は彼ら自身の収入向上のためだけに働くのではなく、地域に何が必要かを考え、寄付もする。コミュニティショップは地域の情報センターとして保健関連の教育を行ったり、保健衛生に関わる情報の普及にも務めている。

■現場訪問のまとめ

事例のまとめのフォーマットに従い、訪問グループで分かれ (それぞれのグループに司会、記録、報告者を決めた) 90 分間まとめを行った。2 グループが発表した(次ページ参照)。

■被爆者の証言集 DVD 「ヒロシマ・ナガサキ」上映

導入として、AHI 清水が原爆の概要、アメリカが急いで原爆を日本に投下した理由等について説明をした。その後、「ヒロシマ・ナガサキ」(英題 “White Light, Black Rain : The Destruction of Hiroshima and Nagasaki” 監督 Steven Okazaki) を鑑賞した。

グループ A1 現場訪問のまとめ：宇井、ジェン、ジル、ジュブ、アルン、デデット

紛争の種類	解決方法	誰が解決を助けているか	戦略	学び	課題	提案
<ul style="list-style-type: none"> - 経済：貧困と食糧不足、移民、土地紛争 - 資源 - 教育：学校の建物と設備、教育のレベル - 保健サービス・衛生・安全な水へのアクセス欠如 - 家庭内暴力、飲酒等の悪癖、家畜の放し飼い - 交通手段不足 - 移住者による文化の崩壊 	<ul style="list-style-type: none"> - 自助グループ作り - 米・牛・豚銀行 - 村保健ボランティア、結核予防等公的事業の補助 - 保健センターへの母親のリファーマ - 貸付貯蓄 - コミュニティショップ - 伝統的な紛争解決方法 - 法的な活動 - 村レベルでの計画と実施 - 紛争解決委員会 - 識字教育 	<ul style="list-style-type: none"> - コミュニティ - 高齢者 - 僧 - 村落開発委員会 - コミュニティ開発委員会 - 紛争解決委員会 - PADEK スタッフ - 政府の保健ワーカー - 警察 - NGO ネットワーク 	<ul style="list-style-type: none"> - 研究：調査 - 地域住民の組織化 - 教育：意識向上・意識化 - 能力育成・信頼醸成 - 地域住民とスタッフによる現場のモニタリングツール - 地域の意思決定に関わる地域リーダー - セクター間の協力 - 土地問題等国レベルのネットワークを通じての政策提言 	<ul style="list-style-type: none"> - 結核予防事業普及のための連携 - コミュニティ自助グループ連合体での異セクター間協力 - 行政との連携 - 季節によって異なる保健課題に対応した住民への保健研修 - 自助グループ育成を通じた人間の尊厳推進 - 定期的な関わりによって効果的な結果を引き出す - 長期的な展望を持って短期的なニーズに対応 - 平和づくりは生涯にわたる関わりとその過程 	<ul style="list-style-type: none"> - 保健センター職員の持続性 - 自助グループに属さないより極貧層への支援 - 基本的な保健ケア 	<ul style="list-style-type: none"> - PADEK と保健センターとのより密な調整（活動計画のための一般的な病気のデータ調査等） - 環境課題や関心の強化 - 下水処理 - 住民の基本ニーズに応えるコミュニティ予算増加 - 極貧層を自助グループに参加させるため活動の見なおし（最低限の貯蓄確保に向けた取り組み等）

グループ A2 現場訪問まとめ：マノハー、ティム・バンナ、優子、ポー・ボリン

紛争の種類	解決方法	誰が解決を助けているか	戦略	学び	課題	提案
<ul style="list-style-type: none"> - 家庭内暴力 - 土地問題 - ギャング - 健康問題 - 政治問題 	<ul style="list-style-type: none"> - 伝統的な方法 	<ul style="list-style-type: none"> - コミュニティ紛争解決委員会（コミュニティ議員3名と自助グループ連合体メンバー3名 - 警察 	<ul style="list-style-type: none"> - 自助グループづくり - 専門ボランティア育成 - 行政職員のリソースとしての活用 	<ul style="list-style-type: none"> - コミュニティが彼ら自身の問題を解決する - PADEK がジェンダーに焦点をあてていること 	<ul style="list-style-type: none"> - 紛争解決への無関心 - 紛争の内容が関係者間で共有されていない 	<ul style="list-style-type: none"> - 記録方式の確立 - 専門ボランティアと保健センターの情報共有

■朝のセッション

昨夜の「ヒロシマ・ナガサキ」のビデオについて振り返りを行った。

■現場訪問のまとめ(続き)

残り2グループが発表を行った。それぞれの発表の後、質疑応答および、下記のような PADEK の活動への建設的な提案を含む議論がなされた。

- 地域住民は地域の問題を中央省庁に直接陳情しがちだが、灌漑など地域的な問題については地域で解決できるものであり、省庁の介入を待つ必要はない
- コンドームの使用等の保健促進活動はコミュニティショップで行うと効果的である(コミュニティショップは多機能である)。しかし運営する人員と資源が不足している。
- B3 が触れたコミュニンの地域づくりと PADEK の計画の統合について、カンナロさんより、PADEK は、地域住民が、自分たちが本当に必要としていることに応える計画を策定することを手助けし、地域事務所でそれをまとめ、郡の年間投資計画に統合させている旨が説明された。また、村での紛争解決委員会の役割が認められたことで、コミュニンレベルにも紛争解決委員会が設置されるようになってきたことが述べられた。

各グループから出された提案は、11月に開かれる PADEK の活動再検討委員会で話し合われる。提案の一部抜粋：

- 薬草やマッサージ等の伝統医学を取り入れる。特に、保健ボランティアの研修等に導入。
- 基本的な保健や衛生に関する住民の行動・態度変容や衛生状況の改善に力を入れる
- 保健状況のモニターなどに関する保健センターとの連携強化
- 極貧層の参加を促進する活動の必要性
- 紛争解決委員会の活動や経験の文書化・記録化
- 協同組合の強化
- 現場スタッフや地域住民の間での州をこえた経験の共有

グループ B3：マレン、コサール、キムゾーン、シスウォ、アジフ、清水

紛争の種類	解決方法	誰が解決を助けているか	戦略	教訓	課題	提案
<ul style="list-style-type: none"> - 家庭内暴力 - 土地問題 (境界線争い) - ギャング 	<ul style="list-style-type: none"> - コミュニケーション - 村のキーパーソン - 地元のエリート (対話仲介者) - 第三者による仲裁 - 第三者による合意形成 	<ul style="list-style-type: none"> - 近隣住民 - 正式なリーダー - 潜在能力のある人 - NGO (PADEK 他) - 地域住民 (紛争解決委員会) - 僧、警察、教師、高齢者 - 自助グループ - 専門ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> - 村、コミュニケーションレベルの住民組織形成 - 住民組織の能力育成 - 法律等関係団体とのネットワーク - 生計向上 - 草の根の人々のエンパワーメント 	<ul style="list-style-type: none"> - 住民参加 - 地元行政の参加 - 草の根の人々が自ら紛争を解決している 	<ul style="list-style-type: none"> - 土地の所有権の欠如 - 飲酒の習慣を変える難しさ - 農業以外の職不足・技術不足 - 貧困 - 土地がない - 読み書きができない・モラルの低さ 	<ul style="list-style-type: none"> - ラジオ番組 - 健康課題や人間関係づくりでの伝統療法の活用と発展

グループ B4：サオ・バンナ、ポリン、モモイ、マム、サムロット、アルカリ

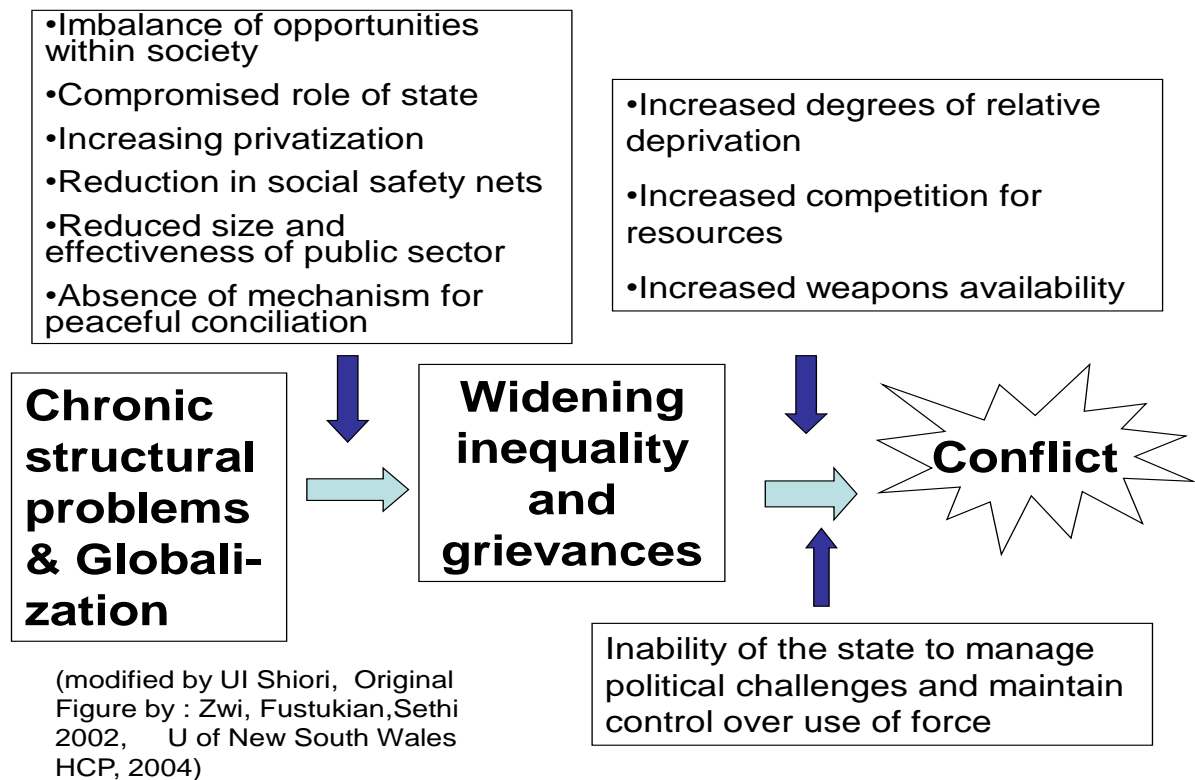
紛争の種類	解決方法	誰が解決を助けているか	戦略	教訓	課題	提案
<ul style="list-style-type: none"> - 資源ベース - 政治と権力 - イデオロギー 	<ul style="list-style-type: none"> - 土地争い - 貧困 - 自然資源へのアクセス不足 - 多大な投入量、少ない成果 - 土地所有権 - 不十分な医療サービス - 教育設備不足・質の低さ - 東西ティモールのインフラ不足 - 地方の学力の低さ 	<ul style="list-style-type: none"> - 村のリーダー、僧、高齢者 - コミュニケーション長 - コミュニケーション紛争解決委員会 - 保健委員会 - 住民組織 - 区、州、中央行政 - 地元・国内・国際 NGO - 安全保障分野の組織 	<ul style="list-style-type: none"> - 住民の組織化とエンパワーメント - ネットワーク醸成 - 能力育成 - 生計とインフラへの補助 - 住民組織の認知と主流化 - モニタリングと評価、記録化 - 包括的アプローチ 	<ul style="list-style-type: none"> - 女性の積極的な参加 - 自助グループの概念 - コミュニティショップと保健センターの関係づくり - PADEK 職員の我慢強い関わり - 住民リーダーと現場スタッフの良好な関係 	<ul style="list-style-type: none"> - 活動地域の拡大 - 研修に参加するための道路の整備 - 農業生産性を高めるための水の不足 	<ul style="list-style-type: none"> - 異なる州の現場スタッフと地域住民の間の経験共有 - 活動地域の限定 - 農民への家庭灌漑システムの設置促進 (農耕用共同貯め池)

■全体のまとめ（カンナロ、宇井、デデット）

グローバル化、健康の不平等、紛争のサイクル

下図について、カンボジアの状況と PADEK の地域活動を例に、平和づくりのための能力形成について、カンナロさんがまとめた。特に PADEK が、生計向上と平和づくりに関わる基本的な課題の解決に尽力していることが強調された。

参加者は、自助グループと住民組織が、住民が地域の問題や関心について発言する場であり、それが平和づくりにつながる重要な能力を獲得する場ともなっていること、地域の課題は、できるかぎり地域で解決するべきものであること、またこれらから、平和づくりの基礎は、強固で持続的な自助グループを育成することであることを確認した。



全ての共有事例と論点が壁に貼られ、参加者は、それぞれの事例を見直し、再度、重要な点をピックアップした。そして、関係者と戦略・活動について、1日目に紹介された「平和づくりの基本概念」の三角形に、下記のようにあてはめた。

レベル	関係者	戦略/活動
国（最上位）	<ul style="list-style-type: none"> - 高位の政府の役人 - 保健政策立案関係省庁 - 国レベルの連合体メンバー - アジア平和青少年団体 	<ul style="list-style-type: none"> - 平和活動団体連合体による政策提言 - NGO としての声明文 - 保健省との情報共有 - 教育/政策提言の基盤としての法律と憲法の活用

	<ul style="list-style-type: none"> - 政党・政治グループ - 国レベルの NGO ネットワーク 	<ul style="list-style-type: none"> - 国際的なパートナーとの連携 - NGO フォーラム - 出版
地域（州）	<ul style="list-style-type: none"> - 州レベルの平和活動家・団体の連合体 - 州保健課 - 州の宗教指導者 - 州の行政職員 - 伝統的・文化的リーダー - NGO ネットワーク - 研修の履修者 - 政党 - メディア 	<ul style="list-style-type: none"> - 各レベルへの紛争解決研修 - 持続性を高めるための行政の枠組みに位置付ける - 参加型アプローチ - 行政や国際 NGO の協力 - 他分野・他分野連携 - 平和のためのデモ - 声を一つにする NGO ネットワークの構築 - NGO ネットワークの政策提言への参加 - 対立者との対話と和解 - 核廃絶宣言 - 問題の明示 - 健康促進のための行政との協力 - 政策立案者への政策提言 - 行政職員に対する倫理教育と現行の政策への理解促進 - 関係者間の話し合い - 異宗教間会合 - 州レベルのワークショップ開催
草の根	<ul style="list-style-type: none"> - 行政の保健従事者（郡病院・郡保健局・保健センター職員） - 地方裁判所、弁護士 - 地域の若者 - 伝統療法（地域の療法師） - 村長 - 自助グループ連合体 - 村の保健ボランティア - 地域住民 - 地域の保健従事者 - 紛争の犠牲者 - 母親、障害者 - 高齢者 - 子ども - 保健センター運営委員会 - 保健センター長 - コミュニティ紛争解決委員長 - コミュニティレベルの住民組織(自助グループ連合体)の長 - 大学生ボランティア - 自助グループ - ボルボト派の元衛生兵 - 地域のソーシャルワーカー - 宗教指導者 - 教師 - コミュニティ紛争解決委員会 	<ul style="list-style-type: none"> - 持続性を高めるための能力育成 - コミュニティレベルの保健活動部門設立 - 地域保健会合 - 事前・事後調査 - 住民への意見や権利の主張の奨励 - 意識向上 - 若い世代の地元での教育 - 全ての人へのサービス提供 - 地域の文化や習慣の奨励（例 相互扶助） - 収入向上のための実用的な技術研修 - 意思決定の場に地域のリーダーが参加する - 青年や女性の組合形成の奨励 - その土地の人々による政治 - 若い人を地域リーダーに育てる - ローカルガバナンス（住民参加）促進 - 若者を地域のリーダーに育成する - 若い人のエンパワーメント - 被害を受けた村が訪問しあう - 自助グループへの参加の奨励 - コミュニティレベルの住民組織がコミュニティ議会に参加する - 専門ボランティアの育成 - 開発活動に平和づくりをとり入れる - 住民の学びの場づくり - PTA の関与 - 紛争解決委員会の設置 - 平和キャンペーン - 関係者間のパートナーシップ - 地域保健ネットワーク

横と縦の統合：平和づくりのアプローチ

下図（Peacebuilding : Caritas Training Manual P170 より抜粋）を参照し、具体的な自分たちの活動や PADEK の事例をあてはめながら、草の根レベルでは、様々な分野・関係者・団体とつながり、地域の権威のようなより上位のレベルにいる人との関係をつくること。同時に、国レベルでは NGO の役割として政策提言を行うなど、横と縦の働きかけの重要性について確認した。そして、活動計画作成に向けて、自分たちの活動と戦略を振り返り、どの部分が弱いか、また強めるべきかを考えた。



Handout 6.1 STRATEGIC CAPACITIES FOR PEACEBUILDING

Vertical Capacity

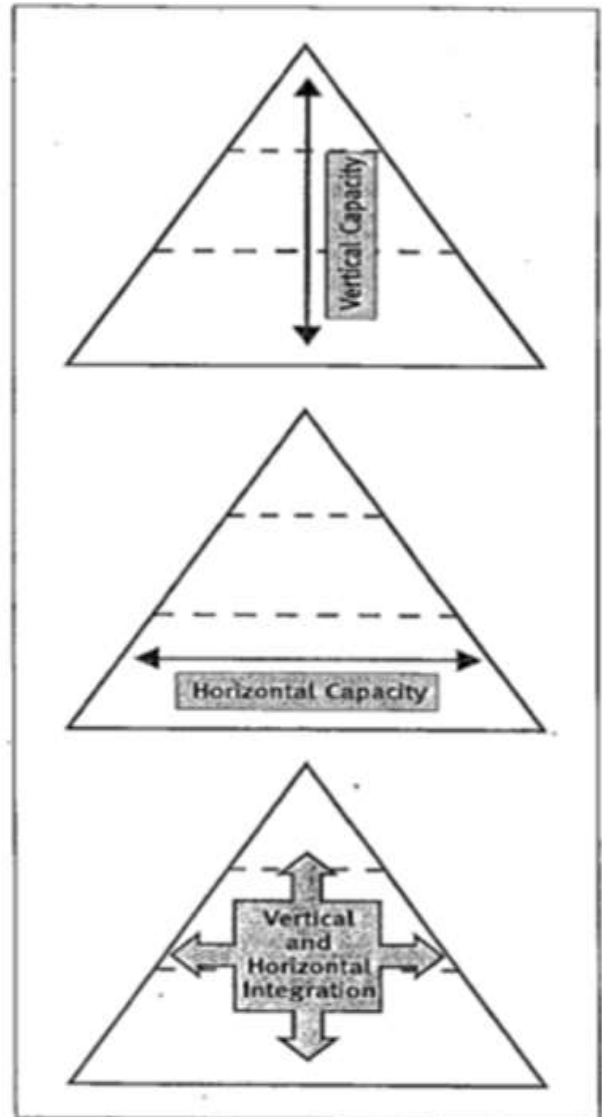
Vertical capacity is relationship building across levels of leadership, authority, and responsibility within a society or system, from the grassroots to the highest leaders. It requires awareness that each level has different needs and unique contributions, but ultimately that levels are interdependent and require the explicit fostering of relationships across levels. Vertical capacity is related to issues of justice.

Horizontal Capacity

Horizontal capacity is relationship building across lines of division in systems and societies divided by identity conflicts. For example, at the grassroots level, usually grassroots groups affiliated with one identity group and other groups associated with another identity group in conflict exist. These grassroots groups have the capacity to establish linkages across conflict lines. Horizontal capacity is related to issues of peace.

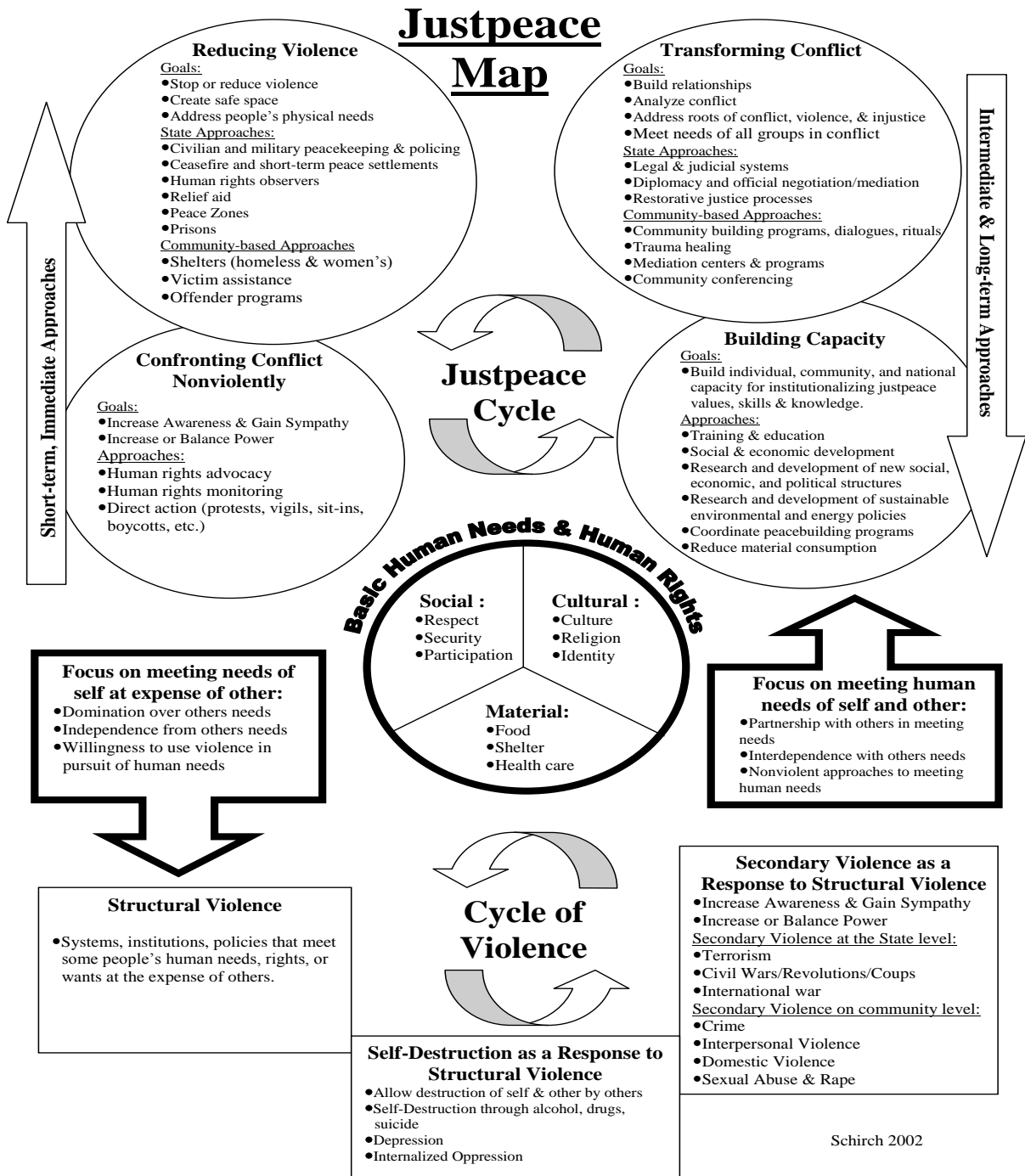
Vertical and Horizontal Integration

This is a strategy for seeking change across conflict lines that explicitly supports processes that link individuals, networks, organisations, and social spaces that demonstrate a capacity for both vertical and horizontal capacity building. By integrating both vertical and horizontal capacities, we are working toward a more just and peaceful society.



ジャストピース(公正平和)の概念

デデットさんより、平和は公正なくしてなしえないこと、したがって、他者を犠牲にして自らのニーズが満たされた状態は平和とはいえない、我々は NGO として、短期的また長期的に、自分自身そして他者両者の人間としてのニーズを満たすために活動すべきであるというメッセージが語られた。



■活動計画作成と発表・ディスカッション

活動計画作成のためのガイドクエスチョン：

- あなたの活動地域に応用できる学びやヒントは何だったか
- それを使って、どのように変化を生み出したいのか
- あなたの活動や戦略は何か
- あなたの役割は何か

作成・発表方法

- 1 昼休み～2:00 の間に各チームでディスカッション・計画の作成
- 2 発表とコメント（各チーム 10 分）

活動計画発表

発表1 ナグディラーフ フィリピン

1 学び

- a) 地方行政は、法的支援をするだけでなく、地域住民の課題にとりくむパートナーを支援し連携する役割がある
- b) 自助グループの貯蓄貸付活動の考え方 現在団体が行っている貯蓄貸付への応用方法
- c) 他の NGO や住民組織との連携強化

2 具体的活動・役割

- ① 団体のスタッフ会合や市議会会合で国際ワークショップの学びや経験を共有する
- ② 現行の事業・戦略にどのように応用できるかを精査する
地元行政に関しては、法的支援や予算の分配に関して、地元 NGO を完全サポートするよう提言する
- ③ 地方自治法と市民団体の認証評価の厳正な実施
- ④ ラミタン市とティポティポ市における参加をどのように進めるかは継続課題

<参加者からのコメント・質問>

- a) b)について、具体的にどんなことを活動に組み入れたいのか？
- 平和づくりに関して、自国のスタッフと一番共有したいことは何か？
- 将来、ナグディラーフが平和づくりに関する国際ワークショップをホストすることを期待する。

発表2 アジフ インドネシア

学び

- 農民グループのコミュニティショップ（収入向上と平和づくりのモデルとして）

- 農民グループづくりと育成のプロセス、特に収穫率を上げるための技術移転

発表3 アグン インドネシア

具体的活動

- 東洋医学療法師のグループづくりを通し、平和づくりにむけた東洋医学の普及につとめる
- 団体の活動を maximize するための役割をとる
 - ・ 来年インドネシアで東洋医学に関する国際ワークショップを開催する
 - ・ 住民、行政職員、団体のメンバーに国際ワークショップの学びを共有する

発表4 シスウォ インドネシア

具体的活動

- 健康づくりと地域づくりを通しての平和づくりの活動を継続する
- 入口としての「健康」を切り口とした若い世代への教育
- 地元の団体、地域住民との連携
- 国際ワークショップで得た技術や知識の活用

<インドネシアの発表者への参加者からのコメント・質問>

- "maximize"とはどう意味か？
答) 平和づくりの活動を増やす、地元行政と国際ワークショップで得たアイデアを共有する
- 具体的にどんなことを共有したいのか？
答) 国際ワークショップで経験したすべてのことを共有したい

発表5 ジュブ・ジル 東ティモール

活動	具体策	自分の役割
1 村で保健推進活動（総合地域保健システム）を継続的に担う家族健康プロモーターの自主性促進	- 村レベルの保健活動運営委員会の設立 - 薬草石鹸づくりの技術研修	ファシリテーター 司会
2 郡内の2つの組合（ロスパロス組合とリキサ組合）の関係強化	- 郡レベルの組合委員会の設立 - 組合ワーキンググループ設立	
3 小学校での衛生教育に平和づくりの要素を入れ込む	- 生徒が参加する衛生コンペ (Competition)	

<参加者からのコメント・質問>

- 衛生教育に平和づくりをどのように組み込むのか？
- "Competition"という言葉は競争を想像させる。平和づくりにおいては友好的な別の言葉を使ったほうがよい。

- 組合活動にどのように平和づくりの活動を組み込むのか？
- 答) 西ティモールと東ティモール、両者を横断する委員会を設立する

発表6 大熊 日本

- 1 学び
 - 対話を通じて様々なレベルでの争いを解決するよう行政に確約させる
- 2 どのように違いを生み出すか
 - 憲法9条と平和に生きる権利についてこれからも広めていく
 - 他のNGO、AHI支援者、そして地域住民との対話の場を設けていく
 - 上記の人々とともに、争いの本質が何であるかを議論し、分析する
- 3 役割
 - 対話の促進者
 - メッセンジャー（若者や子どもへ）
 - 人々のつなぎ役

<参加者からのコメント>

- 学校の教育課程に平和づくりを組み込み、生徒の理解を促すことは必要だ
- フィリピンでは、幼児教育の段階から平和づくりを導入している
- ヒロシマとナガサキについて広めることこそ、中央政府への提言になる

発表7 キムソーン CYDC カンボジア

- 1 学び
 - 自助グループ、コミュニティショップ
 - ワークショップのセッションモデル
 - 牛銀行、豚銀行
 - 村の紛争解決委員会
- 2 活動戦略
 - 地域保健ネットワーク(若者、母親、障害者のグループ)の活動において、平和づくりに焦点を当てる
 - コミュニケーションのリーダーたちに平和づくりに関する研修を行う
 - 牛・豚銀行を行う対象の選別
 - 地域調査チームを、地域での平和づくりを担う者として育成する
- 3 役割
 - ファシリテーター、トレーナー、関係づくりのためのアドバイザー・資金支援者

<参加者からのコメント・質問>

- 地域調査チームとは何か？
- 具体的なステップは？
- 答) 現在村で行っている保健ネットワークづくりの活動に平和づくりを取り入れたいと考えている。まずは既存の研修カリキュラムに平和を組み込み、その後、平和づくりの

研修を開催する。もしAHIの元研修生で平和づくりに関する研修マニュアルや教材があったら活用したい。

←フィリピンのナグディラーブが作っているものがある。それが活用できる

- どのように牛・豚銀行に平和づくりのとりくみをいれこむのか？

発表8 マノハー SRDC ネパール

- NGOの力を集める
- 自助グループの強化
- 平和と紛争に関する意識向上
- 紛争のない地域を作ることを促す
- 異なるグループのコーディネート
- 紛争の被害者を見つけ出す
- 紛争被害者の間の信頼醸成
- 紛争のない社会づくり
- 自立した地域づくり

<参加者からのコメント・質問>

- 上記はすでに実施している活動内容のように思うが、このワークショップを経て、既存の活動に加えようと思う新しいアイデアは何か？

答) 自助グループづくりに平和づくりの視点をいれようと考えている

発表9 PADEK カンボジア

1 学び

- 地域づくりの活動と平和づくりがつながっていることについての理解促進
(今まで平和づくりと地域づくりの関係について聞いてはいたが、日々の地域づくりの活動では意識していなかった。このワークショップに参加し、明確に理解することができた)

2 どのように違いを生み出すか

- PADEK スタッフを対象に、平和づくりに関する再研修を行う
- コミュニティ紛争解決委員会・コミュニティ議会への再研修
- 地域の専門家ボランティア育成の研修に平和づくりの内容を組み込む=原爆のビデオを見せる

3 役割

- ネットワークづくり、研修の開催、平和づくりの支援

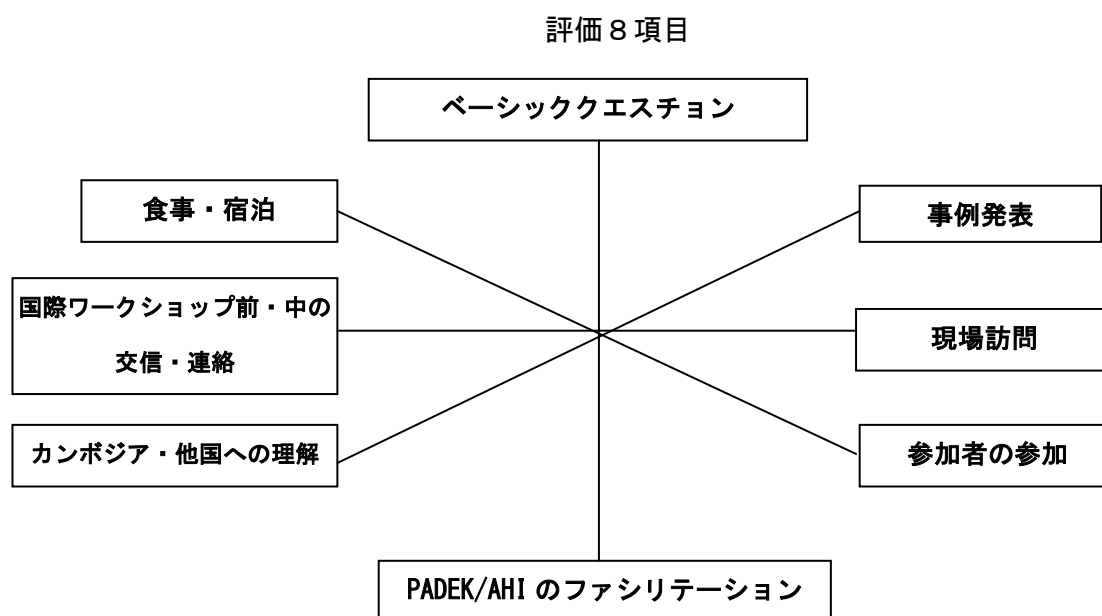
<参加者からのコメント・質問>

- 他のPADEKの職員も、初めて地域活動と平和づくりの関係を理解できたと思っているか？

答) はい。私たちは元紛争地域で活動している。これから、より平和づくりにとりくんでいきたい。今回、他国の参加者から得た提案は、ぜひ考慮していきたい。いくつかの提案は、予算や人員を増やさなくても実践できるものである。

■参加者による評価会合（カンナロ PADEK）

くもの巣手法を用いた、下記の8項目に基づいての考察と、AHI が作成した評価シート（添付18参照）を用いた評価を合わせて行った。



<評価のまとめ>

* よかった点

- ・参加者も開催側も目的・期待を達成したと感じた
- ・プロセスは参加型で、参加者はファシリテーターによるファシリテーションに満足した
- ・現場訪問はテーマにそってアレンジされとてもよいプログラムであった。受け入れてくれた地域の人々、準備をした PADEK のスタッフに感謝する。
- ・カンボジアの参加者と他国からの参加者をリソースとしてセッションが進められたことでお互いの文化や歴史への理解が促された。

* 改善点

- ・チーム内で、英語を話さないパートナーへの通訳が十分されなかった
- ・事例発表は、発表のガイドラインに沿い、テーマに焦点を当てて行うよう参加者が考慮すると、もっと効果的であった
- ・より参加者同士の理解が深めるため、文化交流の時間をもっととれるスケジュールにする
とよい

- ・ムスリムの参加者用の食事については理解不足のため不十分なところがあった。(しかし今回学ぶことができ、今後に生かせる経験となった)

■閉会式 (司会 ソクンティア PADEK)

1) 閉講の辞：PADEK 代表カンナロ (PADEK)

<全文 和訳>

はじめに、AHI の協力のもとで行った今回の地域の健康と開発を通しての平和づくり・国際ワークショップの閉会式の議長を務めていただき、シエムリアップのチーフである Chan Siphil さんに感謝申し上げます。

私はこの場をお借りして、おおまかに今回カンボジアで開催しました 8 日間の国際ワークショップの報告をさせていただきますと思います。このワークショップは様々な国から合計 25 名の方に参加していただきました。その目的は、地域の健康、開発をから得られる平和づくりの経験を共有することにより、新しいアイデアを見出すこと、PADEK の地域開発モデルの統合とその実際の地域から学ぶこと、平和づくりに向けた参加者間の連帯とネットワークを構築すること、でした。

この 8 日間のワークショップ期間中、参加者それぞれがどのように地域と連携して効果的な活動ができるのかということを経験する機会を得ることができたと思います。そして、地方自治体、保健センターのスタッフ、教師とコミュニティの代表者と直接向き合う PADEK の経験から学び、活動しているバリンとアンコールチュムを訪問しました。参加者は地域の人とお互いの文化を共有し、どのようにして社会の中に平和が生み出されたのかを学びあうことができました。現場訪問から戻ってきた後、参加者は彼らの考えたことを真剣にフィードバックし、今後に向けての提案を求められました。またアンコールワットと虐殺博物館、PADEK の事務所を訪問するために 1 日を割り当てました。

歓迎会のあいさつで述べました通り、カンボジアは 30 年以上、社会の規範・信頼・国家の発展のための調和のとれた社会と基盤を構築する自信を破壊させた、内戦とそこからの不安を経験しました。過去 30 年間、今の王国政府のリーダーシップの元、特に物理的なインフラ、人々の生活、政治と社会経済分野で素晴らしい改革が行われました。それらの要素は、国全体で平和と政治的な継続性を優先させることにも繋がりました。

もう一度 PADEK と私に代わりまして、本日の地域保健と開発を通しての平和づくりに関する国際ワークショップの閉会の場に出席してくれた皆様に心から御礼申し上げます。また、色々な国から参加して下さった皆様にも感謝申し上げます。PADEK 主催のこのワークショップにご協力くださった AHI にも感謝申し上げます。みなさんお越しいただいてありがとうございました。皆さんの今後のご活躍を心より願っています。

2) 閉講の辞：宇井 (AHI)

このワークショップを高い意欲とモチベーションを保って、ここに閉会できる事を心より嬉しく思います。

どの参加者も各々の経験・考えを積極的に交換し、PADEK スタッフのみなさんも事業詳細の計画や現地訪問の準備など、参加者のニーズにこたえるために一生懸命に活動してくれました。バリン、アンコールチュム、アンコールトムの方々と地方自治体の協力と温かいおもてなしに感謝いたします。

カンボジアの人々と私の個人的な関わりは、1988 年、カンボジアの難民の方に出会った時にさかのぼります。それからは、カンボジアを平和な国にするということがカンボジアの皆さんと同じく、私の夢になりました。このワークショップで、私は長い間戦争の被害を被った農村地帯のカンボジアの人々に会いました。そして、私たちがその方々の日常生活の苦勞や困難を理解するのを助けてくださいました。同時に、私たちに平和な地域をつ

くる姿勢を示してくださいました。私は、その方々の目標と努力を支援する PADEK の長期的な活動をたたえたいと思います。

ここで“PAECE”を意味する日本語の漢字を紹介したいと思います。（「平和」の漢字を示し、誰もがお腹が満たされることが意味されていることを説明） 私たちはこのワークショップで JUSTPEACE の概念について話し合いました。平和は公正・正義と共にあるべきだと思います。ですから、私たちのカンボジアでの平和づくりはこれからも続きますし、終わる事はないと思います、それは日本でも他の社会でも同じです。平和づくりは、直接的な暴力や戦争がなくなったからといって、終わるわけではありません。将来、世界に更なる平和をもたらすためには、国際的なネットワークと協力が必要です。それはもしかしたら長い時間を要するかもしれませんが、また終わりのない仕事のように思われるかもしれません。

この場をお借りして一つの詩をお伝えしたいと思います。私を動かす原動力になっている詩です。

I am a small one, but I am still one. I cannot do everything, but I can do something. So, let me not refuse to do anything. Just because I cannot do everything.

私は本当に小さな存在です、しかしそれでも1つの存在です。私は何もかもできる存在ではありません、しかしどんなに小さくても何かすることは可能です。だからどんなに小さくても、行動するということに価値を感じてください。だって私は何もかもできるほど大きくないのだから。

私たちも、健康や開発といった活動を通して、平和のために「何か」をしてみましょう。

4000人のAHIを支援してくださっている日本の方に代わって、私からPADEK、カンナロさんやスタッフさんたちにもう一度心から感謝を申し上げたいと思います。

この国際ワークショップにご招待くださりまして誠にありがとうございました。元気に再会出来ることを心より楽しみにしております。ありがとうございました。

この後、続けて、シエムリアップ州議会議長チャン・ソファール氏より祝辞が述べられた。続けて参加者への修了式授与が行われ、閉講式を終了した。

夜は、最後のプログラムとして各国の歌や踊りを披露する親睦会が開催された。それを持って、8日間のワークショップを閉講した。

参加者は翌日、平和づくりにむけた連帯と新たな使命を心に抱き、各自現場への帰路についた。

発行 公益財団法人アジア保健研修所（AHI）

翻訳協力 岡田佳輔 桐田奈々 後藤和也（50音順・敬称略）